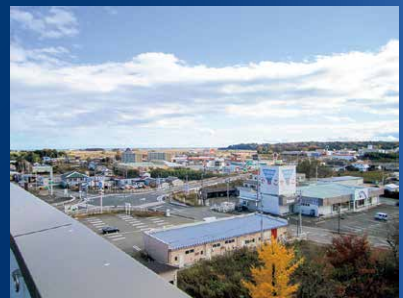


弘前大学



浪江町での活動成果報告書



2026 年 1 月 発行



はじめに

国立大学法人弘前大学

被ばく医療総合研究所長 床次 眞司

2011年3月に発生した東日本大震災とそれに伴う東京電力福島第一原子力発電所事故から15年の年月が経とうとし、福島県双葉郡浪江町の人々の生活は、少しずつ前へ進んでいます。

弘前大学は、震災の起こった同年9月に浪江町と復興支援にかかる協定を結び、「町の再生への支援」「住民の安全・安心の確保」「科学的な知見の蓄積」という三つの目標を掲げながら、これまでさまざまな取り組みを続けてきました。

2017年には避難指示が一部解除され、2025年12月末現在では、およそ2,400名の住民の方が町内で生活されています。生活が再び動き始めた今こそ、正確な科学的根拠に基づく環境放射線の評価や、町民の皆様の安心につながる情報提供の重要性が高まっていると感じています。

本報告書では、浪江町で実施してきた環境放射線測定や住民の方々の被ばく線量評価、生物への影響調査、町民の皆様との様々な交流など、これまでの活動をご紹介します。

こうした取り組みは、地域の人材育成、町民の皆様の不安軽減、復興政策の支援、そして国内外への正しい情報発信につながっています。

また、復興に向けた歩みは、単に放射線量がどうかという数字だけでは語れません。そこには、住民の方々の暮らしや気持ちに寄り添いながら、未来をどう築いていくかという視点が欠かせません。弘前大学は、引き続き科学と地域の橋渡し役として、皆さまとともに歩み続けたいと考えております。

最後になりますが、研究や調査にご協力いただいた、浪江町民の皆さま、浪江町役場の皆さま、研究協力者の皆さま、そしてこれらの活動をご支援いただいた福島イノベーション・コースト構想推進機構の皆さまに心より感謝申し上げます。今後とも温かいご支援、ご協力を賜りますようお願い申し上げます。

目次

1. はじめに	国立大学法人弘前大学 被ばく医療総合研究所長 床次 眞司	1
2. 事業概要		4
3. 挨拶	国立大学法人弘前大学長 福田 眞作	5
	国立大学法人弘前大学学長特別補佐 被ばく医療連携推進機構長 柏倉 幾郎	6
	浪江町長 吉田 栄光	7
4. 活動年表		8
5. 活動内容		
A. 浪江町の復興をフォローアップする地域人材育成のための保健・環境・防災教育プログラム		
(1) 看護学生のための教育プログラム		12
～地域住民の健康不安を低減したい～		
(2) 放射線防護を学ぶ学生のための教育プログラム		14
～空間線量率や大気中の放射線濃度を測る技術を学び調査結果を地域社会へ還元する～		
(3) 放射線生物影響を学ぶ学生のための教育プログラム		16
～子どもたちに浪江町に生息する自然の生き物を知ってほしい～		
(4) 環境防災を学ぶための教育プログラム		18
～災害を「我が事」として学び環境防災を考える～		
(5) 環境放射能を学ぶ学生の教育プログラム		20
～請戸川のサンプリング調査を通して正確な情報を伝える～		
(6) 地域教育を学ぶ学生のための教育プログラム		22
～浪江の子どもたちと一緒に学びたい～		
(7) 浪江町民を対象として放射線リテラシー醸成の教育プログラム		24
～日常生活における放射線について共に学び疑問を解決したい～		
(8) こども園職員自身が放射線リスクコミュニケーションを実践するための教育プログラム		26
～子どもたちが安全・安心な毎日を過ごせるように～		
(9) 桜復興・観光資源保全に向けた教育プログラム		28
～地域の桜の復興を目指して～		
B. 成果報告会のアンケート		30
C. 復興知事業から発展した成果		
(1) 復興知事業に基づく授業		31
(2) 教員研修		32
(3) 出前授業		34

6. 数値で振り返る浪江町での活動	37
-------------------------	----

7. 活動レビュー

(1) 浪江町教育委員会教育長 横山 浩志	39
(2) 前浪江町教育委員会教育長 笠井 淳一	40
(3) 浪江町議会議員 紺野 則夫	42
(4) 浪江町健康保険課長 松本 幸夫	43
(5) 浪江町立浪江にじいろこども園長 馬場 隆一	44
(6) 浪江町立なみえ創成小学校校長 星 輝伸	45
(7) 浪江町立なみえ創成中学校校長 青田 亮一	46
(8) 絆さくらの会会長 小黒 敬三	47
(9) 絆さくらの会 衣川 裕史	48
(10) 浪江町行政区区長会会長 佐藤 秀三	49
(11) 南津島上行政区長 紺野 宏	50
(12) 室原川高瀬川漁業協同組合事務局 菅野 富美恵	51
(13) 弘前市みどりの協会樹木医 小林 勝	52
(14) 東京農業大学 入江 彰昭・矢野 加奈子	53
(15) 卒業生(福島県立医科大学助教) 中山 亮	56
(16) 卒業生(富士電機株式会社) 三瓶 葵	57
(17) 卒業生(長瀬ランダウア株式会社) 織田 侑樹	58
(18) 卒業生(アロカ株式会社) 田岡 愛弥	59

8. アルバム写真	60
-----------------	----

9. 総評	65
-------------	----

公益財団法人福島イノベーション・コースト構想推進機構 福島オフィス教育・人材育成部長

鈴木 康隆

事業概要

弘前大学は、東日本大震災および東京電力福島第一原子力発電所事故直後から浪江町と連携し、甲状腺被ばく線量調査、環境放射線・放射能調査、健康支援、リスクコミュニケーションなどを継続的に実施してきました。これらの活動を通じて構築された地域との信頼関係を基盤に、本事業では、保健・環境・放射線・防災・教育といった多分野を横断する教育プログラムを開発し、学部生・大学院生を中心とした学生教育と、地域住民の学び直しや担い手育成を一体的に展開してきました。特に、被災地における長期的な復興過程に寄り添いながら、大学教育と地域貢献を両立させる「現場実践型教育プログラム」を体系的に構築・展開した点が本事業の特徴であります。

具体的には、看護学生による健康支援活動、放射線防護や環境放射能を学ぶ実習型プログラム、請戸川流域を対象とした環境調査、防災・減災を「我が事」として捉える巡検型教育、子どもたちと自然を学ぶ生物多様性教育、地域住民やこども園職員を対象とした放射線リテラシー醸成プログラムなど、地域ニーズに応じた多様なプログラムを段階的に拡充してきました。さらに近年では、桜の保全・観光資源化を通じた地域再生を目指す教育プログラムも加わり、農学系学生の参画も実現するとともに、浪江町で活動する他大学とも連携して事業を展開しています。

本事業を通じて、学生は被災地の現状や復興の課題を自らの目で捉え、専門知識を社会に還元する経験を積むことで、課題解決力や情報発信力を涵養しています。一方、地域においては、放射線や健康、環境に関する正確な理解の促進に加え、住民同士や大学との継続的な対話の場が形成され、地域コミュニティの再生と将来を担う人材育成に寄与しています。

本事業は、大学の教育・研究資源を活用しながら、地域と共に学び、共に未来をつくる「復興知」の実践モデルとして、今後の被災地支援や地域共創型教育の発展に資するものであります。

未来へつなぐ復興知： 弘前大学の挑戦と感謝

国立大学法人弘前大学長
福田 眞作



弘前大学は、原子力関連施設が多く立地する青森県に位置し、地域の安全・安心を支える重要な役割を担っております。平成 22 年、当時の遠藤正彦学長の強い意志のもと、被ばく医療に特化した教育・研究施設を設立し、同年中に研究所へと改編、現在の「被ばく医療総合研究所」へと発展してまいりました。

翌平成 23 年に発生した東日本大震災に際しては、本学は地震発生直後から DMAT 派遣などの被災地支援に取り組みました。福島県浪江町や南相馬市から避難された住民の皆様に対して、被ばく医療総合研究所のスタッフが迅速に甲状腺被ばく線量調査を実施いたしました。この取り組みを契機に、弘前大学は浪江町と連携協定を締結し、大学内に「復興支援プロジェクト・ワーキンググループ」を設置、除染や環境改善、人材育成、健康・医療・福祉など、多岐にわたる分野で支援活動を展開してまいりました。

佐藤敬前学長の時代には、浪江町役場二本松事務所に「弘前大学復興支援室」を設置し、現地との信頼関係を一層強化いたしました。私自身も、協定締結後三代目の学長として、放射線に関する風評被害の払拭、災害の記録の継承、そして「復興知」事業の推進に注力してまいりました。コロナ禍によって 3 年ぶりの開催となった令和 4 年度弘前大学浪江町復興支援活動成果報告会・交流会に参加して以降、毎年浪江町で行われる成果報告会に参加しています。「復興知」事業の教育活動では、浪江町の皆様のご協力のもと、本学の教職員や学生が福島の浜通りの自然の美しさや豊かさ、食や文化の素晴らしさを、そして様々な活動を通じて触れ合う人と人とのつながりの中で多くの学びを得ることができました。

本年度、「復興知」事業は最終年度を迎えました。これまでの活動に参加した学生からは、「キャリア形成に役立った」「人生において有意義な経験ができた」との声が数多く寄せられております。卒業後も福島で研究や復興支援に携わる学生、あるいは福島以外の地域で就職しながらも引き続き浪江町をはじめとする福島との関わりを望む学生の数は増加しており、その輪は確実に広がりを見せています。

ここに本事業を支えてくださった浪江町の吉田町長をはじめ、福島県内外の関係機関、自治体、企業、そして何より浪江町の地域住民の皆様、心より感謝申し上げます。また、復興支援活動に尽力した教職員、学生の熱意と努力にも深く敬意を表します。

弘前大学と浪江町の連携協定は今年で 14 年目を迎えました。弘前大学は今後も、教育と研究の力を結集し、浪江町の皆様と共に、より良い未来の実現に向けて歩み続けてまいります。

「復興知」を活用した人材育成基盤構築事業までの道のりを振り返って

国立大学法人弘前大学学長特別補佐
被ばく医療連携推進機構長

柏倉 幾郎



福島イノベーションコースト構想推進機構による『大学等の「復興知」を活用した人材育成基盤構築事業』が令和3年度から5年間実施され、本学も「浪江町の復興をフォローアップする地域人材育成のための保健・環境・防災教育プログラム」活動を実施しました。本プログラムでは、地域住民の健康不安低減を目的とした「看護学生のための教育プログラム」、空間線量率や大気中の放射線濃度を測る技術を学び調査結果を地域社会へ還元する「放射線防護を学ぶ学生のための教育プログラム」や請戸川のサンプリング調査を通して正確な情報を伝える「環境放射能を学ぶ学生の教育プログラム」など9項目に及ぶテーマを、被ばく医療総合研究所を中心に保健学研究科、教育学部、理工学部及び農学生命科学部との学内連携体制で取り組んで参りました。

弘前大学は、原子力関連施設を擁する地域的な背景を踏まえ、東日本大震災前の平成20年度から、保健学研究科、被ばく医療総合研究所や高度救命救急センターを中心に被ばく医療体制の整備及び被ばく医療に関わる教育、研究、人材育成、地域貢献や国際連携など多様な活動を行って参りました。平成23年3月に発生した東日本大震災に起因する東京電力・福島第一原子力発電所事故後には、避難所での支援活動に一早く対応し、国立大学法人で最も多くの教職員を派遣しております。こうした活動成果を基に、平成27年には被ばく医療のナショナルセンターである「高度被ばく医療支援センター」及び「原子力災害医療・総合支援センター」の指定を受け、被ばく医療関連活動を統括する全学組織である「被ばく医療連携推進機構」を設置しました。機構内に両センターの活動を担う「放射線安全総合支援センター」を置き、それまでの大学の自主的被ばく医療関連活動に社会的な責務が加わりました。令和4年度には、文部科学省への教育研究組織改革分（組織整備）概算要求事業が採択され、機構内に「災害・被ばく医療教育センター」を新設し、現在は防災士教育はじめ被ばく医療のみならず複合災害に対応し得る人材育成や社会貢献活動にも力を入れております。

本学が「復興知」を活用した人材育成基盤構築事業で培った多くの知見や、浪江町との様々な交流や連携を未来に生かし、地域のさらなる復興と発展に貢献できれば幸いです。最後に、本事業遂行に際し多大なるご協力とご尽力を賜りました吉田町長はじめ浪江町の関係者の皆様、さらには本学の教職員に深く感謝申し上げます。

弘前大学報告書発行に あたって

浪江町長
吉田 栄光



弘前大学の皆様には、平成 23 年 9 月の協定締結以来、15 年間にわたり浪江町の復旧・復興に多大なるご尽力を賜り、心より御礼申し上げます。

また、震災当時の遠藤正彦学長をはじめ、佐藤敬学長、現学長の福田眞作学長並びに教授・学生の皆様から寄せられた多くの知見と、並々ならぬご支援、ご協力に深く感謝申し上げます。

この 5 年の間、福島イノベーション・コースト構想推進機構の「大学等の『復興知』を活用した人材育成基盤構築事業」を通して、「浪江町の復興をフォローアップする地域人材育成のための保健・環境・防災教育プログラム」の実践に尽力していただきました。

学生の皆様を含め、2,000 人を超える方々にご参加いただいたとのこと、弘前大学様全体でのご対応に改めて感謝、御礼申し上げます。

加えて、看護学生の地域実習や町職員・地域住民の支援事業、浪江町での地域教育実習、こども園・小学校・中学校の運動会支援、弘前市における桜管理技術の知見提供、さらには浪江町の桜観光資源保全に携わる地域人材の育成など、多岐にわたる皆様のご活動が、地域にとって大きな力となっております。

この度、大学等の「復興知」を活用した人材育成基盤構築事業は最終年を迎えますが、次年度以降は「復興知」事業に替わる、地域の人材育成に特化した新たな事業展開が予定されていると伺っております。

ぜひ今後とも、皆様のご活動を町としてサポートさせていただきたいと考えております。

復興はまだ道半ばであり、多くの課題が山積しておりますが、これまでの皆様のご活動が地域に根つき、復興を軸としたつながりが浜通りのみならず東北全体、さらには、日本を担う人材の育成に繋がることを心より願っております。

結びに、弘前大学様の益々のご発展と、今後も弘前大学の皆様とともに復興への道を歩んでいけることを祈念し、成果報告書の発行にあたってのご挨拶といたします。

浪江町との14年間

2011 年

- 3月11日東日本大震災および東京電力福島第一原子力発電所事故が発生
- 「被ばく状況調査チーム」を福島県に派遣し、被ばく状況の調査を実施
- 浪江町および南相馬市から福島市に避難した住民を対象に、甲状腺被ばく線量調査を実施
- 「一時立ち入りプロジェクト派遣チーム」を福島県へ派遣し、現地での調査・支援活動を継続
- 9月29日浪江町と連携協定を締結
- 全学的な体制で町の復興支援に取り組むため「福島県浪江町復興支援プロジェクトワーキンググループ」を設置



2012 年

- 8月1日浪江町津島地区の集会所に「弘前大学浪江町復興施設」を設置
- 10月16日浪江町馬場有町長(当時)による特別講演会を開催



2013 年

- 7月1日浪江町役場二本松事務所に「弘前大学浪江町復興支援室」を設置し、開所式を実施
- 10月26日弘前大学にて、浪江町国保仮設津島診療所の関根俊二所長(当時)による特別講演会を開催



2014 年

- 1月22日～24日浪江町役場全職員(約160名)を対象に研修会を開催
- 環境省「弘前大学浪江町復興支援室を拠点に利用したモデル事業」を実施

2015 年

- 2月17日保健学研究科教員・被ばく医療プロフェッショナル修了生による浪江町視察研修
- 環境省「浪江町リスクコミュニケーションに係る拠点事業」開始



2016 年

- 環境省「原子力災害における放射線被ばく事故対応に向けた総合的人材育成プログラム」を開始
- 9月29日馬場有町長(当時)による連携協定締結5周年記念講演会を開催



2017 年

- 環境省「放射線の健康影響に係る研究調査事業」を開始
- 3月31日浪江町の一部で避難指示解除。町役場機能が本庁舎に戻り、支援室も本庁舎に移転し活動を継続

2017 年

- 福島イノベーション・コースト構想推進機構・大学等の「復興知」を活用した福島イノベーション・コースト構想促進事業に採択され事業を開始（～2020年度）
 - ☆看護学専攻学生のための教育プログラム
 - ☆放射線技術科学専攻学生のための教育プログラム
 - ☆福島被災地域からの野生動物アーカイブ試料の解析と生活環境回復及び健康管理に資する調査研究
 - ☆浪江町内の河川中に存在する放射性セシウムの存在形態分析と環境中での動態の解明
 - ☆こども園職員自身が放射線リスクコミュニケーションを実践するための基礎資料開発
 - ☆浪江町民の独居男性高齢者の社会参加を促すアクションリサーチ
 - ☆浪江町民のための放射線リカレント教育教材の開発と実践
- 「浪江町をフィールドとした放射線研究・教育プログラム環境省「放射線の健康影響に係る研究調査事業（若手研究者を活用した研究の加速化）」を開始

2019 年

- 3月9日「弘前大学浪江町復興支援活動成果報告会（第1回）」を開催



2020 年

- 新型コロナウイルス感染症拡大で県外への移動が禁止され、活動が制限
- 4月8日舘戸漁港で震災後初めての競りが再開
- 9月29日8月に開設された「道の駅なみえ」にてリスクコミュニケーションを実施



2021 年

- 1月22日福島県浪江町議会が主催した講演会において、床次所長、三浦教授、赤田教授が「環境中に存在する放射性物質が人体に与える影響とそのリスクを考える」と題して講演
 - 3月26日「弘前大学リレーシンポジウム（第4回）『地域と寄り添う～浪江町とともに～』」を開催し、床次所長、三浦教授、田副准教授、細田教授、姜准教授が講演
 - 福島イノベーション・コースト構想推進機構・大学等の「復興知」を活用した人材育成基盤構築事業に「浪江町の復興をフォローアップする地域人材育成のための保健・環境・防災教育プログラム」が採択され事業を開始（～2025年度）
 - ☆看護学生のための教育プログラム
 - ☆放射線防護を学ぶ学生のための教育プログラム
 - ☆放射線生物影響を学ぶ学生のための教育プログラム
 - ☆環境防災を学ぶ学生のための教育プログラム
 - ☆環境放射能を学ぶ学生のための教育プログラム
 - ☆浪江町民を対象とした放射線リテラシー醸成の教育プログラム
 - ☆こども園職員自身が放射線リスクコミュニケーションを実施するための教育プログラム
 - 毎年（コロナ禍の2021年を除く）秋に「弘前大学浪江町復興支援活動成果報告会」を開催
 - 4月22日浪江町議会議員が福田学長を表敬訪問し意見交換を実施
 - 7月20日「復興知」事業第1回浪江町分科会を開催
- 以降、年度毎に分科会を開催し年度初めの事業計画説明と、年度終わりの事業結果説明を実施



2022 年

- 4月26日・27日浪江町議会議員が福田学長を表敬訪問し意見交換を実施
- 8月7日「復興知」事業で初めての親子昆虫採集体験を実施
- 11月19日コロナ禍で休止していた弘前大学浪江町復興支援活動成果報告会を再開



2023 年

- 3月7日 2024年8月7日に採集した昆虫を標本にしてなみえ創成小学校に展示
- 3月31日浪江町の特定復興再生拠点区域で避難指示が解除
- 福島イノベーション・コースト構想推進機構・大学等の「復興知」を活用した人材育成基盤構築事業に「地域教育を学ぶ学生のための教育プログラム」が追加され教育学部学生も事業に参加
- 10月7日震災以降、こども園が初めて単独で開催した運動会をサポート
- 10月21日津島中学校にて「標葉祭り」が開催健康と放射線に関する相談窓口を開設



2024 年

- 福島イノベーション・コースト構想推進機構・大学等の「復興知」を活用した人材育成基盤構築事業に「桜復興・観光資源保全に向けた教育プログラム」が追加され農学生命科学部学生も事業に参加
- 6月7日川の生き物ふれあい体験を実施
- 6月20・21日浪江町内のさくらの調査を開始
- 12月14・15日絆さくらの会、東京農業大学、弘前大学と協同で剪定・植樹作業を実施



2025 年

- 2月22日地域の方からの要望により津島地区で成果報告会を初めて開催
- 3月21日絆さくらの会の会員7名が弘前公園視察・桜守による指導
- 4月5日浪江町15年ぶりのさくら祭りが開催



これからも支援を続けてまいります



(1) 看護学生のための教育プログラム ～地域住民の健康不安を低減したい

弘前大学大学院保健学研究科 教授 富澤 登志子

1 実施に至った経緯

2013 年より、浪江町に戻られた住民の皆様の健康を支える活動を継続しています。長期避難を経験された方々が地域で安心して暮らせるよう、動脈硬化や骨密度測定などの検査、生活習慣病予防、健康相談を看護学生と共に実施しています。学生にとっては、被災地での活動を通じて住民の方々の健康や生活に触れ、個々の人間性や価値観を理解する貴重な機会となっています。この経験は、健康支援において背景を理解することの重要性を学ぶとともに、復興や原子力災害について考える契機となり、社会課題に向き合う姿勢を育んでいます。



2 実施内容

令和 3 年度～7 年度

学生は、浪江町民や役場職員、園児の保護者、就労者の健康支援活動を継続的に実践するとともに、災害直後から復興までの経過や、人々の生活や心情、復興の在り方、支援の方法についても考察した。

活動内容：

- ① 道の駅なみえでの健康相談：年 2 回実施
ABI・PWV 検査、骨密度、体脂肪・筋肉量の測定、健康相談
- ② 浪江町役場での健康相談：年 1～2 回実施
問診、血圧測定、体組成測定、健康相談
- ③ 子育て支援事業：年 1～2 回
アロマオイル作成およびマッサージおよび放射線リスクコミュニケーション
- ④ 放射線看護高度実践コース 放射線看護学実習Ⅰ：6 月 1 週間

参加者 学部学生 132 名、博士前期課程学生 8 名

表 1 事業に参加された住民数

	R3	R4	R5	R6	R7
道の駅での健康相談	49	10	47	51	31
浪江町職員の健康相談	68	23	19	30	55
子育て支援事業	0	0	4	13	6

3 プログラムの実施による教育効果

1. 専門的知識と実践の統合

- 大学で学んだ放射線の知識やケアが、住民との対話を通じ「生きた知識」へ変化
- 保健師や看護師の実際の仕事を見て、将来のキャリア形成に対する意識が高まる。

2. コミュニケーション能力の向上

- 緊張して住民とうまく話せなかった学生も、教員や先輩の助言（フィードバック）を受けながら対話を繰り返すことで、スムーズに信頼関係を築けるようになる
- 対象者に合わせた「寄り添う姿勢」の重要性を学ぶ。

3. 被災地に対する認識の変容(固定観念の打破)

- 訪問前は「活気がない」「放射線が怖い」といったネガティブなイメージの学生もいたが、実際に訪問して住民の強さや温かさに触れることで、復興が進む現状を前向きに捉えるようになった。

4. 市民意識(シチズンシップ)と「復興」への深い理解

- 専門職としての社会的責任を自覚し、自ら進んで地域社会に貢献しようとする姿勢が育まれた。
- 「復興」とは単なるインフラ整備(ハード面)だけでなく、住民の心の安寧やコミュニティの再生(ソフト面)が不可欠であることを多角的に理解できた。

5. 政治や社会への関心が高まる

- 特に低学年の学生においては、災害や復興について学んだ学生がなぜこのような現状になっているのか、現状のシステムにどのような課題があるのか、どのような問題を住民が体験したのかなど、学ぶ過程で現地訪問をして実際に確かめ、新たな課題意識、社会情勢などへの関心が広まった。

6. リーダーシップの醸成

- 活動を従属的でなく主体的に考え、動いていく経験をし、リーダーシップが醸成。

4 プログラムに参加した学生の声

浪江町での健康相談活動と報告会の参加をふまえて学んだこと

弘前大学医学部保健学科看護学専攻 4年 小野 由貴

大学等の「復興知」を活用した人材育成基盤構築事業の一環として、令和7年11月17日(月)に浪江町役場でフィールドワークを行った。本フィールドワークでは、浪江町職員を対象に問診や血圧測定、体組成測定等を実施し、心身の状況を把握するとともに、健康に関する悩みの傾聴や健康保持・増進に向けた情報提供を行った。

健康相談の実施状況として、本フィールドワークは2012年1月から継続して行われており、参加者の約8割が継続参加者であった。対象者は新卒から管理職まで幅広い年齢層で構成されており、自身の健康に対して関心を持つ人が多いという特徴が見られた。また、活動報告会では、浪江町の伝承館や震災遺構となっている小学校の見学、道の駅での健康相談、子育て支援活動におけるアロマハンドクリーム作成やマッサージ見学を通して、各グループで得た学びや新たな気づきを共有することができた。

フィールドワークや報告会を通して得られた学びが2点ある。まず1点目は、参加者が継続的に健康相談に参加してくれている理由として、これまでの関わりの中で支援者である本フィールドワーク実施者との信頼関係が構築されてきたことが挙げられると考えた。信頼関係を築くためには、災害発生後の時期ごとに変化する健康課題を把握し、対象者の生活や心身に寄り添った対応を行うことが重要であると学んだ。次に2点目は、私たち看護学生は住民から「学生」としてだけでなく、「看護や健康に関する専門的な知識を持つ人」として見られていることに気づいた。測定値の意味や生活習慣の改善策について質問される場面は、私の班だけでなく他の班でも多く見られた。看護学生は単なる学生ではなく、健康に関する相談役として頼られる存在でもあるため、専門的知識や看護技術を身につけておく必要があると学んだ。

浪江町の復興に対して私たちができることは、今回の活動内容や浪江町の現状について周囲に伝えていくことであると考えた。被災から14年が経過した現在、観光客の増加や地元の祭りの復活など、活気が戻りつつある一方で、いまだに浪江町に戻れない人が多い現状や、被ばくのイメージが強く残り、危険区域であると誤認されている課題も存在している。浪江町での活動を通して得た情報や放射線に関する正しい知識、災害の影響と復興力を発信していくことが、浪江町の復興につながると考えた。

浪江での健康相談活動における学び

弘前大学医学部保健学科看護学専攻 4年 中松 樹

2024年11月16日から17日にかけて、福島県浪江町を訪れ、東日本大震災・原子力災害伝承館の見学および道の駅なみえでの健康相談活動に参加した。本活動を通して、災害から時間が経過した復興期・平穏期にある地域の現状を、現地で住民と関わる中で学ぶ機会を得た。

初日に訪れた東日本大震災・原子力災害伝承館では、事故当時の混乱や避難の経過、住民の生活が突然一変した状況について、写真や映像、証言を通して学んだ。発災直後の情報不足や選択を迫られる厳しさ、家族や地域との分断など、災害がもたらす影響の大きさを改めて実感した。特に印象に残ったのは、事故から年月が経過した現在もなお、その影響が生活や心の中に残り続けている点である。一方で、困難な状況の中でも地域の再生に向けて歩みを止めず、浪江町を支えてきた人々の努力や工夫が現在の姿につながっていることも学びであった。

2日目には、道の駅なみえにおいて体組成、骨密度、四肢血圧の測定を行い、その結果をもとに健康相談を実施した。測定値だけでなく、日頃の生活習慣や体調への思いを聞く中で、住民が自身の健康と向き合いながら生活されている様子がうかがえた。測定中や説明の際には笑顔で話される方も多く、浪江町では人々の笑顔が多く見られたことが印象的であった。

震災や原発事故による負の影響は注目されやすいが、今回の活動を通して、地域の人々の努力によって生まれた前向きな変化や穏やかな日常も確かに存在していると実感した。また、「話を聞いてもらえて安心した」などの声から、健康相談が身体的評価にとどまらず、心理的な安心感を与える機会にもなっていることを学んだ。

災害後の支援は発災直後だけでなく、復興期や平穏期においても継続したからこそ私たちもその経過やこれまでの歩みを知ることができた。私が見た浪江町は「被災地」というよりも、「自分たちの力で前に進もうとする地域」のように感じられた。一方で、放射線や健康問題に対する不安は、インフラの復旧のみで区切りをつけられるものではないとも感じている。だからこそ重要なのは、支援の目的を「支えること」から、「支えなくても回る状態をつくること」へと転換していく視点ではないだろうか。現地で実際の姿を見て住民の声を聞くことで初めて見えてくる現状がある。困難な側面だけでなく、前向きな姿や変化も含めて正しく把握し伝えていくことは、私たちにできる支援の一つである。浪江町での学びを、今後の学習や実践に生かし、災害と向き合う地域の姿を伝え続けていきたい。

(2) 放射線防護を学ぶ学生のための教育プログラム

～空間線量率や大気中の放射線濃度を測る技術を学び調査結果を地域社会へ還元する～

弘前大学被ばく医療総合研究所 所長・教授 床次 真司

1 実施に至った経緯

福島県で起きた原子力災害では、地震と津波が重なったことで放射線のモニタリングがうまく行えなかったという課題がありました。そのような中、弘前大学は発災直後から浪江町に寄り添い、放射線の測定を続けてきました。この経験を次の世代へしっかりと伝えていくことが、災害の教訓を生かすことにつながると考えています。

このプログラムでは、学生たちが実際に災害時に使われた方法で放射線を測定し、当時の状況を少しでも体感できるようにしています。測定したデータをもとに、浪江町の「昔」と「今」に思いを巡らせる時間も設けています。また、津島地区で行われた標葉祭りでは、プログラムに参加した学生が会場の放射線を測定し、開催準備の手伝いをさせていただきました。これからも、浪江町の皆さんに寄り添いながら活動を続けていきたいと思っています。



2 実施内容

(1) 大学内の研修

我が国の原子力防災体制と、原子力防災における環境放射線モニタリングの目的と仕組み、及び平常時と緊急時のモニタリング方法の違いを学びました。また、原発事故時の福島県および浪江町の被災状況と、現在の復興の状況も学習しました。浪江町において環境放射線測定に関する野外研修を行った後は、データの分析方法を学習し、実際に取得したデータを用いて分析を行いました。



(2) 浪江町における野外研修

旧南津島上集会所や浪江町役場津島支所に観測装置を設置し、外気中を浮遊する放射性物質を捕集しました。また、空間放射線量を把握するため、放射線測定器を車載し町内全域で測定を行ったり、歩行しながら測定を行ったりしました。



3 プログラムの実施による教育効果

原子力災害に対応した教員が講師となり、当時の経験を聞きながら被災地において環境放射線の測定に関する経験を積むことができるのは、学生に机上では得ることができない深い学びや、思いがけない気づきをもたらします。このような実りあるプログラムを実施することができたのは、震災当初から連携が始まった浪江町と弘前大学との長い歴史があったからこそです。

受講生は、研修成果を発信するためポスターを作成しています。夏祭り等の地域のイベントにおいてこのポスターを掲示し、放射線の状況などを住民の皆さんに知っていただきました。また、このプログラムには10名を超える留学生も参加しました。留学生が母国に帰り研修成果を還元するとともに、浪江町に関する情報を発信することを期待しています。



4 プログラムに参加した学生の声



飯島 駿太郎
弘前大学医学部保健学科
放射線技術科学専攻
(2024 年にプログラムに参加)

本プログラムでは、放射線測定器を自動車内に搭載し、走行しながら測定を行う自動車走行サーベイ法を用いて浪江町の空間放射線量を調べました。測定対象であるガンマ線の一部は車体によって減衰するため、同一地点で車内外の測定を行い、その差に基づき測定値を補正し、信頼性の高いデータの取得に努めました。

実際に現地で測定を行う中で、数値として表れる空間放射線量の背景にある環境要因を自らの目と手で確認することができたことは非常に学びが大きかったです。特に、道路の舗装状況や地形、周囲の建物などが空間放射線量の変動へ与える影響を測定中にリアルタイムで確認することができ、座学では得られない多くの知見を得ることができました。また、空間放射線量の高低差の背景には、震災・原発事故時の避難状況や除染の履歴、地質・地形といった地域の歴史的、社会的要因が関係していることを実感しました。

測定に携わる中で印象的だったのは、単に空間放射線量を測定しデータを取得するだけではなく、「そのデータが誰のために、何のために使われるのか」を常に意識する必要があるということです。放射線のデータは、住民の安心な生活に直結する重要な情報です。だからこそ、測定の精度と妥当性、分かりやすい情報発信に責任を持つ必要があることを強く認識しました。

今回の経験を通して、放射線に関する理解がより具体的かつ実感を伴うものとなりました。講義や教科書を通じて得た知識が現地の測定経験と結びついたことで、空間放射線量の変化が示す意味や数字の背景を以前より深く考えるようになりました。さらに、住民の生活と密接に関わる研究に携わっているという自覚も強まり、研究を行う者としての責任と社会的意義を実感しました。

今後は、得られた知識と経験を活かし、住民へ正確かつ分かりやすい情報を積極的に発信し、復興の一助となるよう努めていくとともに、地域社会に貢献できる放射線の専門家を目指していきたいと考えています。

(3) 放射線生物影響を学ぶ学生のための教育プログラム

～子どもたちに浪江町に生息する自然の生き物を知ってほしい～

弘前大学被ばく医療総合研究所 教授 三浦 富智

1 実施に至った経緯

平成 23 年 10 月より、当方は浪江町において野生動物の放射線被ばく影響調査および子どもへの初期被ばく検査に従事し、住民避難や除染に伴う自然環境の変化を把握してきた。その過程で、地域住民から生き物の変化を放射線と関連付ける声が寄せられ、放射線生物影響に関する正確な理解を促進する必要性を認識した。

住民帰還後、なみえ創成小学校・中学校が開講したものの、児童が町内の自然に触れる機会は乏しい状況であった。平成 24 年の「なみえの子どもたちの想い」における「自然豊かな町への期待」を踏まえ、自然環境を題材とした体験学習プログラム「生物多様性体験型学習プログラム（昆虫採集編）」の開発を検討した。

学校側の要望を受け、安全に自然と接する機会を提供するため、昆虫採集および顕微鏡観察を組み合わせた体験学習を実施した。令和 4 年度の実施後、福島イノベーション・コースト構想推進機構より小中学校向け教育支援プログラム開発への期待が示されたことから、弘前大学教育学部学生にも参加機会を拡大した。

さらに令和 5 年度、なみえ創成小学校教諭から、川の生き物にも触れさせたいとの要望があり、室原川・高瀬川漁業協同組合の協力を得て「川の生き物ふれあい体験学習」を立案し、令和 6 年度には、室原川・高瀬川漁業協同組合の協力を得て「生物多様性体験型学習プログラム（水生生物編）」を実施し、児童の自然理解を促進した。これらの取組を通じ、地域の自然環境および生物多様性への関心を高める教育的効果が確認された。



2 実施内容

(1) 生物多様性体験型学習プログラム（昆虫採集編）

①体験学習実施場所の予備調査とプログラム実施法の立案（令和 4 年度）

みちのくファウナリサーチの協力を得て、当研究室学生とともに浪江町フィールドで空間線量率測定および昆虫の予備調査を実施し、校外学習候補地を選定した。捕獲した昆虫の観察・同定を行い、指導方法を検討した結果を小学校へ報告し、実施方法について協議した。

②プログラムの施行（令和 4 年度）

なみえ創成小学校の児童生徒にプログラム参加募集を行い、1 家族の申し込みがあった。金ヶ森溜池および大平山霊園でプログラムを施行し、その結果を小学校へ報告した。

③なみえ創成小学校における校外学習（令和 4 ～ 7 年度）

プログラム試行終了後、同年秋に大平山霊園でなみえ創成小学校の校外活動を実施した。令和 6 年度からは、教育学部・保健学科の学生が参加し、丈六公園に会場を変更して校外学習として継続している。

④親子参加型体験学習（令和 5 ～ 7 年度）

なみえ創成小学校の児童生徒に対し、放射線や人と自然との関わりについて理解を深めることは容易ではない。本学習は、児童の体験を家庭内で共有することで、親子双方の関心を高めることを目的とした活動である。

(2) 生物多様性体験型学習プログラム（水生生物編）

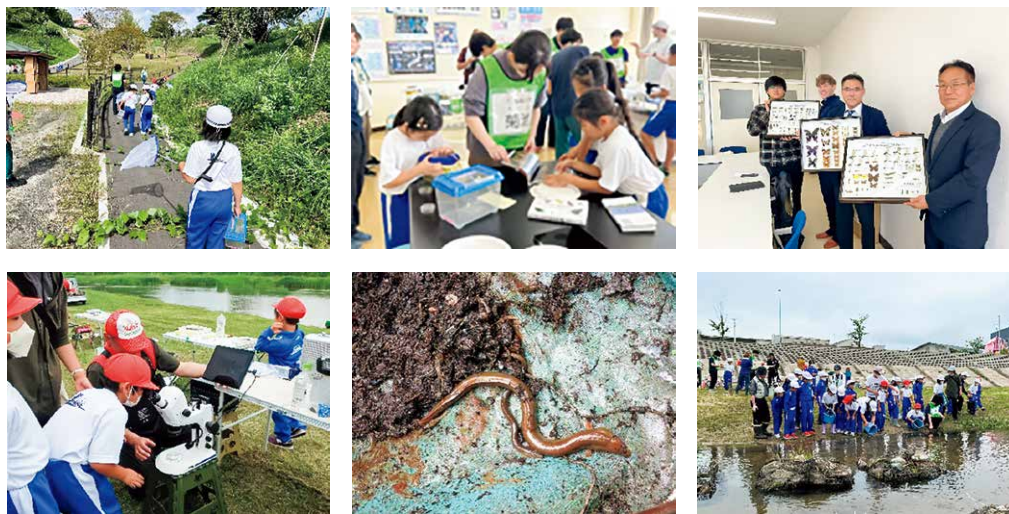
浪江町の子どもたちが日常的に親しむ道の駅なみえ付近を流れる請戸川を対象に、身近な川の生物に触れ、顕微鏡観察を通じて水中生物の体の構造を理解する学習プログラムを実施した。淡水産水産物の放射性物質濃度の減少が遅く、内水面漁業の再開が遅延している状況において、地元漁協の協力を得て、将来の地域の文化・産業を担う子どもたちの育成を目的としている。活動では、最初は魚やカニを怖がっていた児童も、次第に積極的に生き物に触れることができるようになった。

3 プログラムの実施による教育効果

弘前大学は、なみえ創成小学校・中学校との連携を通じ、放射線への理解、震災復興、教育再生に関する学生の関心を高めることができた。大学講義においても活動内容を紹介した結果、プログラム未参加の学生からも浪江町を訪問し被災地の現状を学びたいとの意見が増加している。

本学は、浪江町での復興支援や学校連携を、研究活動の場としてのみならず、学生教育へ還元する機会として位置付けている。東日本大震災後、放射線被ばくと複合災害に対応できる人材育成を重視し、令和5年度から学部横断型副専攻「放射線総合科学」を開始した。浪江町での体験学習や「古さと創造学」への参加により、学生が放射線を正しく理解し、被災地の実情を踏まえて災害時に地域を牽引できる能力の育成を目指している。

また、これらの教育プログラムを経験した教育学部学生が、学びを自らの言葉で子どもたちに還元することを期待している。あわせて、一連の体験学習を通じて、児童生徒が故郷の自然環境や生物多様性への理解を深め、地域社会に関心を持って成長していくことを期待する。



4 プログラムに参加した学生の声

「放射線生物影響を学ぶ学生のための教育プログラム」を通して

弘前大学大学院保健学研究科 博士前期課程1年 沖本 彩華

本プログラムでは、なみえ創成小学校の子供たちが川の生き物や昆虫など、浪江町の自然との触れ合いを通して多くの新しい発見や驚きを経験していました。

漁業協同組合の皆さまのご協力のもと、請戸川の石倉カゴにかかった魚や石に付着した水生生物を探したり、公園で昆虫を追いかけ採集したり、顕微鏡や図鑑を使いながら調べたりする活動は、子供たちが浪江町の自然への理解を深める貴重な機会となりました。最初は道具の扱いに戸惑ったり、生き物に触れることをためらっていた子供たちも、次第に興味を示し、自ら進んで生き物と向き合い観察する姿が印象的でした。また、採集した生き物を顕微鏡で観察する場面では、子供たちの積極的な姿勢に驚かされました。顕微鏡の前には、採集した生き物を手にした子供たちの列が自然とでき、期待に胸を弾ませて順番を待っている姿がありました。画面に映し出された顕微鏡下の生き物を見て口々に驚きを語る様子からは、生き物への興味が着実に深まっていくことが実感できました。

こうした子供たちとの活動の他に、東日本大震災・原子力災害伝承館や震災遺構である請戸小学校を訪れ、震災当時の状況やその後の復興の歩みを自分の目で見て学ぶことができました。私自身、本プログラムに参加するまでは福島について十分に理解していたとは言えませんでした。被災地域の状況を直接見聞きできたことで、報道や文献だけでは得られない現地の空気や重みを感じる有意義な学びとなりました。また、私の周囲にも福島の現在を十分に知らない人が多いことに改めて気づき、今回得た学びを積極的に共有していきたいと考えています。

本プログラムを通して、浪江町の子供たちにとって自然の生き物と触れ合うことは非常に貴重な体験であり、福島の未来を担う世代の成長に欠かせないものであると実感しました。自然との関わりは、生き物の知識を深めるだけでなく、地域への愛着や主体的に学ぶ姿勢を育むうえで重要な要素です。また、本プログラムに参加した大学生にとっては、東日本大震災や原発事故、そして福島の現在について理解を深める貴重な機会となりました。今後も地域や大学など様々な機関が協力し、子供たちが自然と触れ合う場や大学生が福島について学ぶ機会を継続的に確保していくことが重要であると考えています。

(4) 環境防災を学ぶための教育プログラム ～災害を「我が事」として学び環境防災を考える～

弘前大学大学院理工学研究科 客員研究員
 弘前大学被ばく医療連携推進機構 客員研究員
 弘前大学被ばく医療総合研究所 客員研究員 片岡 俊一

1 実施に至った経緯

自然災害を減らすためには、「我が事」（＝自分にも関係があること）として受け止めることがとても大切です。我々は、学生が災害を「我が事」として考えられるよう、震災の跡地などを訪れる機会をつくってきました。その一貫として東日本大震災の被災地にも学生を連れて行きたいとは思っていましたが、距離が遠いために機会を作ることができませんでした。

一方で、福島県の浪江町については、2011年から続く当大学との交流を通じて、私自身は被災地の一つとして状況の変化を学んできました。浪江町には2つの地震計が設置されていることも興味を持っていた理由の一つです。加えて、震災遺構となった請戸小学校や双葉町に建設された東日本大震災・原子力災害伝承館にも大変興味を持っており、訪問する機会を窺っていました。

そんなおり、大学の知識を活かして人材を育てる「復興知」の取り組みを知り、地震防災について学生が学べるプログラムを提案したところ、ありがたいことに採択となりました。災害は地域の自然環境と社会環境に影響を受けます。そこで、このプログラムでは主として地形や地質の特徴などの自然環境を学び、さらに地震記録に基づいて地震動が地表付近で大きくなることを学ぶことを目指しました。加えて、震災遺構を利用して、学生の意識が社会環境にも考えが及ぶことを意図しました。



2 実施内容

このプログラムは、学部で地震学を含む地球科学の基礎的な知識を身につけ、さらに地震防災を学習した学部学生を対象としています。

現地に赴く前に、東北地方太平洋沖地震そのものから始まり、地震と津波による災害の概要について90分程度の学習を行います。ついで、福島県、特に浜通りにおける災害の状況を原子力事故を含んで90分程度学びます。その際には、浪江町に2ヶ所ある地震観測所で得られた記録についての解説もおこなっています。

現地では、震災遺構請戸小学校や東日本大震災・原子力災害伝承館で学習するだけでなく、相馬市伝承鎮魂祈念館およびその周辺で津波の被害や現在の潮位観測装置を見学しています。また、富岡町にあるとみおかアーカイブ・ミュージアムで地形、地質の成り立ちについても学びます。また、移動の最中に車中から地形について考察するとともに、人々の生活についても解説を受けています。勿論、浪江町に2ヶ所ある地震観測所も訪れています。

さらに、家屋等の悉皆調査が行われた浪江町駅周辺を調査報告を片手に散策し、地震時当時を偲ぶことも行っています。



3 プログラムの実施による教育効果

このプログラムには、5年間で21名の学生が参加しました。参加した学生の殆どは社会基盤施設の計画、設計、施工、維持管理に関わる組織・機関に就職しています。学生たちが災害を「遠い話」ではなく「我が事」として感じるようになったことから、社会基盤施設の重要性を改めて感じてくれていると思います。

このプログラムでは、施設を見学するだけでなく、事前学習や現地での移動、宿泊があります。事前学習を踏まえて現地に滞在することで、被災された方々、復興工事に従事されている方々の生活が理解できたとの感想が学生から寄せられています。



4 プログラムに参加した学生の声

環境防災を学ぶ学生のための教育プログラムへの参加感想

弘前大学理工学部地球環境防災学科 4年 更科 光太郎

今回私がこのプログラムに参加したきっかけは、以前個人で福島震災遺構を訪れた際に、メディアでしか得ることのできなかった実際の被害状況を目の当たりにし、東日本大震災の被害と教訓をより深く学ぶ必要性を感じたためです。実際に参加してみて、被災地域への関心や復興への理解が一層深まり、大変有意義な時間となりました。

行程の中で訪れた、震災遺構である小学校の見学や原子力災害伝承館の被災時の写真は衝撃的で、強く印象に残りました。私はこのプログラムを経て、特に学んだ被災地の現状や当時起きていたことを他の人に伝えたいと考えようになりました。東日本大震災を経験した身ではありますが、地震のみを受けた私にとって津波による被害や放射線被害はあまりにも大きく、他人事ではないものと痛感しました。自身を含め、映像や写真でしか事の重大さを知らなかった周りの人々にこのことを伝えていく必要があると感じました。

さらに、現地で宿泊をすることによって現在浪江町をはじめとする被災地域でどのような人が働いているのか、どういった復興事業を行なっているのかを体感することができました。実際、被害を受けた地域では復興事業に従事する方々の姿が多く見られ、これまでにない感覚を覚えました。これらの経験はさまざまな経緯で現在の被災地域が成り立っていることを実感し、現地で自分の目で見ることでは得られない非常に貴重な体験となりました。

また、震災遺構の見学を通じて、津波によって建物がどう動くのか、建築物に津波が侵入した方向からどういった崩壊が始まったのか、さらには地震による破壊についても学ぶことができ、建築物の力学的な視点から被害を捉えることができました。加えて、高台がある場所、被災地域の地形・地質を把握することでなぜこの場所で被害が広がったのかということや、どうすれば被害を減らせたかと自発的に考えるようになり、防災の視点でも大きな知見を得られたと感じています。

依然として多くの課題は残されていますが、このプログラムを通じて得られた震災や原発事故に関する反省点や教訓は、自分の防災・復興に対する考え方に大きな影響を与えてくれました。このような機会を設けてくださったことに、大変感謝申し上げます。

(5) 環境放射能を学ぶ学生の教育プログラム

～請戸川のサンプリング調査を通して正確な情報を伝える～

弘前大学被ばく医療総合研究所 教授 赤田 尚史

1 実施に至った経緯

浪江町は、海に近い地域では復興が進んでいますが、山の方ではまだ放射線量が高い場所も残っています。町を流れる「請戸川」は、山から海へとつながる川で、町の自然や環境を考えるうえでとても大切な存在です。事故の前は、町の人たちにとって心のよりどころだったこの川も、今では台風などで汚染された土が流れてくる心配もあり、復興の課題のひとつとなっています。フィールドワークでは、請戸川のいろいろな場所で水を採取したり、観測したりしています。津島地区（上流）：川の水を採取、加倉地域（中流）：井戸水を採取・水位の観測、幾世橋地区（下流）：川の水を採取、なみえ創成小・中学校：雨水の採取方法や、天気データの取り方を学習。また、福島県内の研究機関では、最新の研究やデータの発信方法について学びました。

この活動の成果をまとめて、「請戸川ってどんな川？」という冊子を作り、地域子どもたちに配る予定です。自然のこと、環境のこと、そして自分たちの町のことを、もっと身近に感じてもらえるように工夫していきます。



2 実施内容

浪江町を流域とする請戸川水系（請戸川・高瀬川）の上流部は、事故に伴う放射能汚染の影響を受けており、その一部は事故から14年以上が経過した現在においても帰還困難区域に指定されている。町役場を中心とする行政および産業機能は空間線量率の低い沿岸地域に集積している一方で、山間部には依然として高い空間線量率を示す地域が存在する。浪江町を流域とする二級河川の請戸川は、これらの山間部と沿岸部をつないでおり、放射性核種の移動に大きく寄与している。また、河川水は地域環境の保全や我々の生命の維持にとっても欠かせないものであることから、地域の自然と水質の関係について、調査方法を含めて理解することは、復興知学として重要である。本課題では、浪江町の自然について請戸川およびその流域を対象に講義を行うとともに、水試料の採取および化学処理方法に関するフィールドワークを実施し、水質および流域特性に関する理解を深めた。また、環境放射能の評価に関する実践的な演習として、定期的に採取した試料を用いた放射性核種および基本水質項目の測定を学内で実施した。加えて、アウトリーチ活動として、町内で開催された各種イベントにおいて「利き水」ブースを出展し、浪江町の水の素晴らしさを紹介するとともに、請戸川を対象としたフォトブックを作成し、小中学生に向けて請戸川の自然の豊かさを発信した。

3 プログラムの実施による教育効果

本プログラムには、医学部保健学科および大学院保健学研究科の学生を中心に、理工系の学部や大学院だけでなく、教育学部の文系学生も参加するプログラムとなった。本プログラムに参加した学生は、特定復興再生拠点区域である浪江町津島地区の状況や、地域の水資源とその化学組成について理解するとともに、滞留時間の理解を通じて地域の水資源量を理解した。浪江町の水道水は、「NAMIE WATER」として市販されており、モンドセレクションに選ばれるきれいでおいしい水である。この水質分析を通して得られて知見を基に、浪江町で開催されたイベントで利き水体験を実施し、その水のきれいさ、おいしさを住民やイベント参加者に自分の言葉で直接説明してもらった。学生は、硬水と軟水の違い、カルシウムとマグネシウム濃度の違い、飲用水の安全性を説明することで水の大切さを十分に理解した。これらの成果は、参加大学院生により論文として発表するとともに、大気環境学会北海道東北支部大会における口頭発表については若手優秀発表賞に選ばれた。したがって、本プログラムにより得られた成果は専門性の高い学会においても意義深いものであり、学生への教育効果にとどまらず、学術的にも貢献するものとなった。

4 プログラムに参加した学生の声

環境放射能を学ぶ学生の教育プログラムに参加して

弘前大学大学院保健学研究科 博士前期課程2年 北山 結彩

私がこのプログラムに参加したきっかけは、大学で学んだ放射線の知識を実際の現場で試し、自分の手で測定を行う経験を通して理解を深めたいと考えたことです。

プログラムでは、請戸川でのサンプリングから実験室での測定まで、一連の流れを実践的に学びました。その中で、測定には多くの細かな手順や注意点があることを実感し、そこで得られる一つひとつのデータが自然環境を理解する上で欠かさない基盤になることを改めて感じました。

浪江町を訪れる中では、地域の自然や生活環境についても深く学びました。浪江町は豊かな自然に囲まれており、町の中心を流れる請戸川は農地や生活用水を支える重要な存在となっています。一方で、原発事故以降は放射線の影響から自然との距離が生まれ、子どもたちが川や山で遊ぶ機会が減っていると伺いました。地域にとって身近で大切だった自然とのつながりが弱まりつつある今、現状を正しく理解し、安心して過ごせる環境を整えるためにも、環境放射能測定の役割は大きいと感じました。

地域イベントでは町民の方々と交流し、放射線について自主的に学んでいる方や、地域の設備を使って測定を行っている方が多くいらっしゃることを知り、とても印象に残りました。地域の方々の放射線への関心の高さに触れ、私自身も身の引き締まる思いがしました。私たちが測定したデータを説明する際には、専門的な内容をできるだけ分かりやすく伝えることを心掛けました。学生の言葉に熱心に耳を傾けてくださる姿に嬉しさを感じました。

また、国内外の学会で発表する機会もあり、資料や説明の工夫の重要性を実感しました。回を重ねるごとに伝える力が高まったと感じると同時に、正確な情報を丁寧に届ける責任の大きさも強く意識するようになりました。

このプログラムは、学生が浪江町の自然や地域の歩みを自分の目で確かめる貴重な機会であったと思います。私自身、初めて参加した2年前から現在まで、町の復興が着実に進んでいることを実感しました。今後は、これまでの学びや経験を生かし、浪江町の自然環境や放射線に関するデータや知見を、地域の子どもたちや町民の方々をはじめ、多くの人々の理解につながるよう、正確でわかりやすい形で発信していきたいと考えています。そして、これらの取り組みを通じて、福島県および浪江町の復興に貢献していきたいと思っています。

(6) 地域教育を学ぶ学生のための教育プログラム ～浪江の子どもたちと一緒に学びたい～

弘前大学教育学部 教授 長南 幸安

1 実施に至った経緯

東日本大震災の前、浪江町にはたくさんの子どもたちが通う小学校や中学校がありました。全部で小学校が6校、中学校が3校、約1,700人の児童・生徒がいました。震災のあと、町の人たちは避難を余儀なくされましたが、少しずつ学校も再開されていきました。2018年には、避難指示が一部解除されたことを受けて、浪江町に「なみえ創成小学校・中学校」が新しく開校しました。同じ年に「浪江にじろこども園」も開園しました。2021年には「なみえ創成小・中学校」以外のすべての町立小・中学校が閉校となりました。

このプログラムは、弘前大学の教育学部などで教員を目指す学生が福島県浪江町を訪れて、現地の学校や子どもたちとの交流を通して、震災からの復興について学ぶことを目的に、2023年度にスタートしました。小学生向けの「生物多様性を学ぶ体験学習」や、中学生向けの「放射線について学ぶ出前授業」などがあります。浪江町では子どもたちの数が少しずつ増えてきており、それを支える先生方からは、学生が教育現場に参加することで、運動会などの大きな行事の準備や運営を手伝ってもらえたり、授業中のサポートや子どもたちとの日常的な関わりが増えることで、現場の力になっていると高く評価されています。学生にとっても、実際の教育の現場で貴重な経験ができる機会となっています。



2 実施内容

① なみえ創成小・中学校合同運動会

参加人数 5名程度

日程：5月中旬(2泊3日)

② 生物多様性体験型学習プログラム(水生生物採集/昆虫採集・同定)

参加人数 3～4名程度

日程：水生生物 6月上旬(2泊3日)

昆虫 10月下旬(2泊3日)

③ 小学校教育支援(なみえ創成小学校で学校教育オブザーブ・支援)

参加人数：2～4名

日程：9月中旬(6泊7日)

④ 浪江にじろこども園運動会

参加人数 3～4名程度

日程：10月上旬(2泊3日)

⑤ 出前授業(なみえ創成中学校1-3年生向け講義・実習)

参加人数 2～3名程度

日程：1月下旬(1泊2日)



3 プログラムの実施による教育効果

東日本大震災により津波と原子力発電所の事故で被害を受けた福島県浪江町であるが、復興が進められており、浪江町に子ども達も戻りつつある。そのような中で、東日本大震災の被害から復興の過程を教育という視点で、将来教育に携わる教育学部生に浪江町の実業にサポートという形で関わってもらうことが目的である。この事業への参加希望者が多く、予定人数を超えて参加者を増やしたり抽選により選考をする必要があるほど人気があった。また参加した学生も非常に満足しており、そのため複数の事業に参加したり毎年希望を出す学生も出ているリピーターが多い事業であった。福島県出身の学生も、参加することで卒業後に福島県で教員になることの意味と意義を体感できた事業であると感じている。交流した児童・生徒との関係も良好であり、教育現場からも事業継続の要望が出ている。このように参加した学生には、復興地での教育サポートにより、将来教員になるための貴重な経験が得られるとともに、浪江町の児童・生徒にも大きな印象を残すことができ、有益な教育効果が得られたと考えている。

4 プログラムに参加した学生の声

教育支援活動を通して得た喜びと学び

弘前大学教育学部学校教育教員養成課程初等中等教育専攻小学校コース2年 三本木 美紗(福島県出身)

私は昨年の小・中学校合同運動会と今年の小学校での教育支援に参加させていただきました。福島県出身であり将来福島県で教員を目指している私にとって、弘前にいながらも福島の学校や子どもたちと関わることでできたことは大きな喜びでした。

特に今年の5日間の教育支援では、児童と直接顔を重ねて関わっていく中で、信頼関係が少しずつ築かれていくのを実感しました。初めは話しかけても無反応だった児童が数日後には自分から話しかけてくれるようになり、その変化が嬉しかったです。先生方の仕事の間近で見ることができたことも貴重な経験でした。私が特に心を打たれたのは、児童が下校した後、担任の先生が教室でピアノの練習をしていた姿です。この様子から、児童のために見えないところで努力を重ねていることを知り、私もそのように、子どもたちを支える教員になりたいと思いました。

私は震災当時5歳で浪江町の隣の田村市に住んでいました。震災や復興は私にとってはとても関心のある事柄です。この活動を通して少しでも福島の復興に携わることができたことを嬉しく思います。

児童の反応を目の当たりにして

弘前大学教育学部学校教育教員養成課程初等中等教育専攻小学校コース2年 山上 心

昨年に引き続き今年もなみえ創成小学校で1週間の教育支援をさせていただきました。この2年間、児童の授業や休み時間、放課後児童クラブでの様子を目の当たりにした。中でも、児童が興味を示す瞬間に立ち会えたことが印象に残っている。周囲の声が聞こえなくなるほど作業にのめりこむ児童の姿や「先生、〇〇すごかった!」と見たことを報告しに来てくれた児童の輝かしい目など、教育支援が終わってしばらく経った今でも鮮明に思い浮かべられる。大学の授業では、児童が興味を持てるような授業展開や教材の選択などの指導を受けているが、それに対する児童の反応は実際に現場に足を運んだ人間にしかわからない。大学に入学して1年目から2年間継続してこのような経験ができたことに感謝すると同時に、私も児童が様々なことに興味をもって活動していくことができるようなサポートができる教員になりたいと強く思った。

この機会に浪江町(福島県)との関係を終わりとするのではなく、私が目指す教員として、福島県の復興に何かしらの形でかかわっていききたい。

浪江町での活動を通して

弘前大学教育学部学校教育教員養成課程初等中等教育専攻中学校コース国語専修2年 増井 清那(福島県出身)

福島県出身の私にとって、幼いころから東日本大震災や原子力発電所の事故は身近な課題であり、ボランティアの方々の活動やたくさんの支援を見て育つ中で、「いつか自分も福島の役に立つことがしたい」と思っていました。

大学に進学してすぐにこの事業があることを知り、小学校の運動会に参加したことで、初めて浪江町を訪問することになりました。小学校の子供たちが元気に活動する一方で、まだまだ課題や復興支援が必要な浪江町を見て、役に立ちたいという思いがより強くなりました。本年度からは副専攻プログラム「放射線総合科学」の履修を始め、放射線の理解を深めるとともに防災士資格の取得を目指しています。

また、来年度から執筆予定の卒業論文では浪江町を研究フィールドとし防災と教育をテーマにする予定です。今後もこのプログラムで得た知識やつながりを大切にしながら福島県の復興に貢献していくとともに、教育活動を通して子ども達が胸を張って「私の地元は福島県です」と言うことができるように活動していきたいと考えています。

(7) 浪江町民を対象とした放射線リテラシー醸成の教育プログラム

～日常生活における放射線について共に学び疑問を解決したい～

弘前大学被ばく医療総合研究所 特任助教 菊池 和貴

1 実施に至った経緯

2011年3月の震災以降、浪江町の皆さんは福島県内外に避難されました。その中で、「放射線って本当に大丈夫なの？」といった帰れるの？というご相談がたくさんありました。弘前大学では、そうした声に寄り添いながら、放射線に関する情報をわかりやすく伝え、住民の皆さんと直接お話しする『リスクコミュニケーション』を続けてきました。リスクコミュニケーションを継続するにつれて、避難指示解除前もしくは解除直後から弘前大学が携わってきた住民の方と、最近に帰還した方もしくは新しく移住した方とでは放射線に対する理解に差が生じており、後者の皆さんから「なぜ、早くに帰還した住民の方々は放射線を気にせずに生活できるのか」という相談をいただくようになりました。

そこで、放射線の専門家によるリスクコミュニケーションのみではなく、実際に住民同士がリスクコミュニケーションし合える場を設け、専門家やリスクコミュニケーターがそれをサポートすることで、地域全体の放射線に対する理解を醸成することを目標に本プログラムが開始されました。避難指示が解除されて8年が経過した現在では、帰還した方々と新しく移住した方々が一緒に暮らし、弘前大学と住民の皆さんが長年にわたって続けてきた「放射線についての対話」が、浪江町の復興の力となっています。



2 実施内容

年度（延べ回）	内 容	開催事例
令和3（1）	水道水・井戸水に関する最新の情報、安心して飲用できること	【令和3年度】 - 浪江町民からの放射線に関する相談として最も多いのは「食品」関連 - 山菜やキノコ、飲用水など住民にとって身近なものについて話題を提供 - 調理実習や簡易的な実験などの体験をとおして学習
（2）	キノコの放射性物質濃度と内部被ばく線量について	
（3）	クリの放射性物質濃度と内部被ばく線量について	
（4）	魚の調理方法と放射性物質濃度の低減について	
（5）	ユズの調理方法と放射性物質濃度の低減について	
令和4（6）	浪江町の第一次産業を知らう～内水面漁業編①～	【令和4年度】 「食品」に関連する放射線について「第一次産業」の話題をとおして学習 - 浪江町の第一次産業に携わっている講師（町民を含む）による話題提供 - 浪江町の現状と帰還後の生活における経験等について参加者間で情報共有
（7）	浪江町の第一次産業を知らう～内水面漁業編②～	
（8）	浪江町の第一次産業を知らう～海洋漁業編①～	
（9）	浪江町の第一次産業を知らう～海洋漁業編②～	
（10）	浪江町の第一次産業を知らう～農業編①～	
（11）	浪江町の第一次産業を知らう～農業編②～	【令和5～6年度】 - 福島第一原子力発電所におけるALPS等処理水の海洋放出に関して「福島第一原子力発電所視察ツアー」と講話、意見交換を実施 - 海洋放出開始に関連し、浪江町の海洋漁業に関する情報提供
令和5（12）	福島第一原子力発電所の「今」を知らう①	
（13）	福島第一原子力発電所の「今」を知らう②	
（14）	福島第一原子力発電所の「今」を知らう③	
（15）	浪江町の海洋漁業を知らう①	
（16）	浪江町の海洋漁業を知らう②	【令和6～7年度】 - 令和5年3月31日に避難指示が解除された特定復興再生拠点区域 - 区域内で生活する住民向けに生活上で不安や疑問に感じている放射線に関する話題について情報提供 - 放射線の専門家と住民、住民同士で対話が可能なる機会を提供
（17）	福島第一原子力発電所の「今」を知らう④	
令和6（18）	特定復興再生拠点区域における生活について①	
（19）	特定復興再生拠点区域における生活について②	
（20）	特定復興再生拠点区域における生活について③	
（21）	浪江町の海洋漁業について	津島地区における環境放射線状況 大気放射線マップ（2024年11月） ▶ 活断層センターや地盤的には0.2から0.3 μSv/h程度に上昇した場所では値が高くなる傾向
（22）	特定復興再生拠点区域における生活について④	
令和7（23）	特定復興再生拠点区域における生活について⑤	
（24）	特定復興再生拠点区域における生活について⑥	
（25）	特定復興再生拠点区域における生活について⑦	
（26）	特定復興再生拠点区域における生活について⑧	
（27）	特定復興再生拠点区域における情報発信	

3 プログラムの実施による教育効果

本プログラムでは、放射線の専門家と住民の皆さんが気軽に話し合える場をつくり、日々の生活の中で感じる不安や疑問を一緒に解消してきました。さらに、放射線に関する知識を生活へ活かしている方々が、新しい住民にその経験を伝えることで、放射線に対する理解と生活における安心感が醸成されました。また、これらの取り組みは、住民同士の関係構築や地域コミュニティを再生するための機会を提供し、専門的な話に限らず「暮らしの中でどう感じているか」を共有し合える町づくりに寄与しました。

年 度	プログラムによる育成人材（令和 7 年 12 月時点の延べ人数）		
	大学生・大学院生	地域住民	年度別小計
令和 3 年	2	43	45
令和 4 年	5	61	66
令和 5 年	4	54	58
令和 6 年	3	71	74
令和 7 年	5	29	34
育成人材別小計	19	258	合計 277

4 プログラムに参加した学生の声



柴田 絢（SHIBATA Aya）
弘前大学大学院地域共創科学研究科
地域リノベーション専攻 修士課程 2 年

理工学部 2 年（2021 年度）の冬に福島県富岡町を初めて訪れ、その後も何度か訪問していました。学部 4 年に副専攻「放射線総合科学」が始まり、それをきっかけに被ばく医療総合研究所の様々な浪江町に関する事業へ参加しました。副専攻の授業以外にも、原子力規制庁や東北電力でのインターンを通じて、放射線について多面的に学べたことは貴重な経験となりました。また、学部のゼミで浪江町を訪れたことも良い思い出です。修士課程進学後は富岡町を研究フィールドとし、就職も富岡町を予定していますが、浪江町とのつながりも大切にし、福島県の復興に貢献していきたいです。



(8) こども園職員自身が放射線リスクコミュニケーションを実践するための教育プログラム ～子どもたちが安全・安心な毎日を過ごせるように～

弘前大学大学院保健学研究科(兼)被ばく医療総合研究所 助教 工藤 ひろみ

1 実施に至った経緯

こども園では、2017年8月から、職員が放射線についての基礎知識を学び、安心して働けるように支援を続けてきました。それ以来、園内外で職員自身が定期的に空間線量や遊具の表面の汚れ(放射性物質の有無)を測る活動を行っています。この取り組みは、職員が自分たちで測定を続けられるようにサポートすること、そして測定の中で「これって大丈夫かな?」と感じたときに、専門家に相談できる体制を整えることを目的としています。

今年度は、こどもたちの食育活動の一環として「芋づくり」にチャレンジすることになり事前に空間線量と土の放射能濃度を調べてほしいという依頼があり実際に現地で測定を行い、その結果をお伝えしました。



2 実施内容

令和3年度 - 令和7年度

園外での園児の活動場所の線量測定、職員からの相談対応を行う(3か月に1回程度)

職員自身が、主体的に正しい方法で定期的な線量測定を継続できる体制を支援。令和6年度は、これまでの測定結果をもとに、スタッフの測定にかかる時間の負担を考慮し、測定頻度や測定箇所の見直しを行った。さらに、令和6年から7年度にかけては園児の課外活動の範囲(請戸浜、丈六公園、園の農地など)における放射線測定を行い、調査結果の還元を行った。



3 プログラムの実施による教育効果

本プログラムでは、こども園のスタッフの皆様と住民の皆さんが継続的に園や園庭の放射線量を測定するということを継続していただいています。

今回のプログラムでは、大学院生の方に、園の課外活動時の範囲の放射線線量測定や、農作物の放射能を測定してもらいました。また、その結果を資料としてまとめ、園のスタッフの方に教員のサポートの元、院生の方に説明させていただく機会も設けました。

説明資料の作成にあたっては、対象者にとって必要な情報を整理することや、リスクコミュニケーションの観点から専門用語をわかりやすい言葉に置き換えることの難しさを学ぶ機会となった様です。対象者にとって理解しやすい表現で説明することは、放射線に限らず多くの分野で求められる重要な姿勢です。この学びは、医療従事者に必要とされる姿勢にも通じるものがあります。医療現場では、患者が説明に納得したうえで治療法を選択する「インフォームドコンセント」が重視されています。放射線に関するリスクコミュニケーションも同様に、相手が理解し納得したうえで判断できるよう支援することが重要であり、本プログラムを通じてそのような教育的効果も得られたのではないかと考えています。

4 プログラムに参加した学生の声

活動を通して得た学びとコミュニケーションの重要性

弘前大学大学院保健学研究科 博士前期課程 1年 鈴木 和博

今回のプログラムでは、測定から結果のフィードバックまで一連の過程に携わる機会をいただき、自ら作成した説明資料がこども園の今後の方針決定において一助となったことに、大きなやりがいを感じました。現地で取得した測定手法を町からの依頼に応用し、実際の地域の要望に対して自分の技術を活かしたことは、これまでの勉強が現場で役に立っていると実感できた瞬間であり、学生としても貴重な経験となりました。

また、今回の取り組みを通して、たとえ同じ線量であったとしても、立場や組織が持つ独自の基準によってその捉え方が異なることも実感することができました。地域の方々が何を求め、どのような情報を必要としているのかは、教科書から学べるようなことではなく、地域の方々の声に耳を傾ける姿勢が不可欠であると学びました。正しい知識を持つことはもちろんのこと、何よりその知識をどのように伝えれば相手の理解と安心につながるかを考えることが放射線に携わる者として重要であると感じました。

一方で、専門用語を過度に使用せず、情報の正確性も保った説明をすることの難しさにも直面しました。すべての情報を網羅的に提示することは重要である一方、過度な情報はかえって不安を強めてしまう可能性があります。相手が本当に知りたいことを見極め、要望に対して過不足なく、かつ正確な情報を提供するためには、自分自身が説明内容以上の知識を持ち、十分な準備をした上で臨むことが必要であることを痛感しました。

さらに、実際に地域の方々とお話しする中で、データの価値や言葉の説得力は信頼関係があってこそ意味を持つのだと感じました。このような関係は一度で築けるものではなく、継続的な調査や定期的な対話を積み重ねる中で、少しずつ形づくられていくものです。今回の活動を通じて、データの背景には必ず人との関わりがあることを改めて意識するようになりました。

これらの経験から、私は正しい放射線の知識を自らの言葉で丁寧に伝え、地域の方々の不安を和らげ、安心につながる情報を届けられる人材へと成長していきたいと思うようになりました。現地測定や資料作成の過程で多くの助言をくださった先生方、そして温かく迎えてくださったこども園の職員の皆様に、心より感謝申し上げます。今回得た学びを大切にしながら、身につけてきた知識と経験を今後も活かし、より信頼される放射線従事者を目指して努力を重ねてまいります。

(9) 桜復興・観光資源保全に向けた教育プログラム ～地域の桜の復興を目指して～

弘前大学農学生命科学部 准教授 本多 和茂

1 実施に至った経緯

震災の影響で、桜の手入れをする人が少なくなってしまった浪江町。そんな中、2023年11月に吉田町長から「桜を守りたい」という相談があり、このプロジェクトが始まりました。

桜の名所・弘前公園の管理をしている樹木医の協力のもと、弘前大学の調査チームが立ち上がり、2024年6月には浪江町の桜の調査を実施しました。その結果をもとに、桜をボランティアで守っている「絆さくらの会」、桜の植樹をしている東京農業大学と一緒に話し合いを重ね、桜の復興と観光資源としての保全に向けた計画を立てました。

2024年11月には剪定技術の指導会を開き、12月には学生たちも参加して桜の剪定と植樹を行いました。そして2025年4月、震災後初となる「さくら祭り」が15年ぶりに開催され、町内外からたくさんの方が訪れました。

今後も、関係者が力を合わせて剪定講習会や植樹を行いながら、町の皆さんが自分たちの手で桜を守り、未来へつないでいける方法を考えていきます。



2 実施内容

1. 浪江町内の桜の調査 (2024年6月20～21日)

サクラが植栽されている町内8箇所のサクラ樹の現況を樹木医で元弘前公園桜守の小林勝氏と共に調査した。

実施箇所 6/20：1. 大平山霊園「宇宙桜」 2. 請戸小学校 3. リバーライン 4. 立野 隠れザクラ

6/21：1. 津島小学校 2. 津島中学校 3. 丈六公園 4. 大堀

2. 浪江町内の桜の調査報告 (2024年7月25日)

浪江町役場にて、吉田町長も同席の元、被ばく医療総合研究所副所長三浦先生、鳥潟室長とともに、6月の調査報告を行った。

3. 復興知事令和6年度弘前大学浪江町復興支援活動成果報告会 (2024年10月5日)

「桜復興・観光資源保全に向けた教育プログラム 浪江町内の桜の調査～今後にむけて」6月の調査結果を報告すると共にそれを踏まえ、今後について提案を行った。

4. 桜復興・観光資源保全に向けた教育プログラム 技術指導 (2024年11月29～30日)

11/29：小林氏による「サクラの剪定法」の講習

11/30：小林氏とともに現地における技術指導を行った。

5. 絆さくらの会、東京農業大学と剪定・管理実習 (2024年12月14～15日)

12/14：桜の剪定・管理実習

12/15：桜の植樹・管理実習 研究室学生6名参加

6. 桜復興・観光資源保全に向けた教育プログラム 桜の剪定・管理実習指導 (2025年2月15～16日)

権現堂～リバーラインメインストリートの剪定：次季フェーズにむけた冬季強剪定

7. 桜復興・観光資源保全に向けた教育プログラム 桜の剪定その後および見出されていた「早咲きのサクラ」の視察 (2025年3月30日)

8. 弘前大学浪江町桜復興プロジェクト リバーライン桜の芽接ぎ (2025年9月4～5日)

7.で確認されていた早咲きのサクラ枝の一部を採集し、オオシマザクラへの芽接ぎを行った。小林氏も同行し、技術指導にあたった。

9. 「復興知」事業 桜復興プログラム (桜の剪定・植樹) (2025年11月28～30日)

11/29：桜の剪定・管理実習

11/30：桜の植樹・管理実習 研究室学生5名参加

3 プログラムの実施による教育効果

2024年6月20～21日の調査以降6回にわたりサクラの剪定や肥培管理および芽接ぎによる増殖など、サクラの管理に関わる多くのことを浪江の絆さくらの会小黒会長およびメンバーに伝えてきた。うち4回は樹木医で元弘前公園桜守の小林勝氏の同行が叶い、うち2回は小林氏による講習も含めた内容で、座学とその実践という形で、多くの参加者が知識を伴った活きた技術を身につけていったと考える。実際、プログラム実施を進めてゆく中で、参加者らのサクラ管理の面での確かな成長を感じることがあった。

また、本研究室の学生も興味を持って主体的に東京農業大学と合同の剪定・管理実習に参加し、その数は二カ年でのべ11人にのぼった(5. 2024年:3年生3名,4年生3名 9. 2025年:3年生1名,4年生3名,大学院生1名)。のべ11名参加のうち3名=6名は、二カ年連続で参加しており、その関心の深さを示す。以降の4で参加した学生の感想や想いが示されているが、各々にとって意義深く心に残るプログラムとなっている。



4 プログラムに参加した学生の声

弘前大学農学生命科学部国際園芸農学科 園芸農学コース3年 奥山 愛子

活動を通して、桜の管理の難しさを学びました。特に、高枝切りバサミを使って高い位置の枝を剪定する作業は、腕の力を十分に使う必要があり、体力的にも技術的にも最も大変でした。また、苗木を植樹する際には急斜面の土を掘る作業があり、足場が不安定な中での作業は想像以上に大変でした。しかし、その分、剪定や植樹が無事に終わった時の達成感は非常に大きく、強く心に残る良い思い出となりました。作業中は、浪江町がかつての賑わいを取り戻すことができるよう願いを込めながら一つ一つの作業に向き合いました。今回、大切に作業を施した桜を、再び見に訪れたいと思います。

作業をする中で、身の回りにある花や植物が多くの人々の苦勞によって育てられていることを実感しました。そこから、日々、植物の管理に携わる人々への感謝の気持ちを持つようになりました。3.11の記憶を風化させず、浪江町に「また帰ってきたい」と明るい気持ちになる人が増えるよう、このような地域復興プログラムにまた参加したいです。また、今回参加できなかった同期や、身の回りの人たちに、浪江町で得た、自分の経験を語ることで、浪江町、さらに福島県の魅力を伝えていこうと思います。

岩手大学大学院連合農学研究科 生物生産科学専攻 青沼 彩菜

今回の活動を通じて、桜の管理には想像以上に多くの手間と時間が必要であることを実感しました。講義や教科書で得た知識だけではなく、実際に剪定や植樹を体験することで、桜を守り育てる難しさと大切さを学びました。また、若い世代を含め、多くの人々の協力が欠かせないことも強く感じました。活動前は桜を自分の「研究対象」として捉えていましたが、活動後は桜を「地域の人々と共に守り育てる存在」としての意識が生まれ、自身の研究と地域貢献のつながりをより深く考えるようになりました。今後、浪江町の桜を題材とした研究を行える機会があれば、その魅力や価値を多くの人に伝えるきっかけとなり、桜が地域の希望や復興の象徴として人々に受け止めてもらえる可能性を感じています。さらに、この桜を次世代へと受け継ぎ、浪江町の観光資源である桜を守る一助となれば嬉しく思います。桜を通じて浪江町や福島県に継続的に関わり、地域の人々と絆を深めながら未来へとつながる活動を続けていきたいと思っています。



開催年度	活動への要望・活動へ期待する意見	各意見に関するまとめ
2018	浪江町だけではなく、相双地区として活動してほしい。 野生動物の調査と報告を継続してほしい。 人体への影響、特に子どもへの影響を心配している 浪江町で生産できるものについて、飼料以外にも提案してほしい。 以前のように牛を飼育したいため、飼料の作り方をおしえてほしい。 活動を継続して、その成果で風評被害等を減らすことへ繋げてほしい。	『弘前大学による活動への認知』回答者のうち 92% 復興支援活動の継続を望む声が多く、調査結果等について住民や社会へ還元することで風評被害が低減することを期待している。特に、原発事故による人体や野生動物への影響に関する調査や、町内で生産可能な作物の提案に関する成果を期待している。
2022	10 年で一区切りではなく活動を継続してほしい。 弘前大学の色々な学部による交流活動をしてほしい。 町民と共に実施する活動を増やしてほしい。 原子力発電所の放射線に関する勉強会を続けてほしい。 子どもを連れて帰って来れるか、家の中の線量や住民の不安に寄り添ってほしい。 請戸川の魚の調査結果がみれて嬉しい。 トリチウムの講演は、ニュースを賑わせている内容のため、正しい理解を発信するために大切な取り組みだと感じた。 健康に関する相談や支援を長く続けてほしい。 弘大囃子組の演奏がとても美しく心に響いた。 弘前大学の取り組みについて、町民をはじめ広く発信してほしい。 震災直後から、浪江町のサポートをずっと続けて下さりありがとうございます。心強く思います。	『弘前大学による活動への認知』回答者のうち 55% 東日本大震災から 10 年以上経過したことで、福島県の復興に関して一区切りがついたという風潮を感じる反面、住民は復興が道半ばであると認識しており、弘前大学による復興支援活動の継続と認知向上を強く望んでいる。また、成果報告会と交流会を併せた取り組みは好評であり、調査や健康支援以外にも、住民と学生が交流できる機会の提供を望む声が多かった。
2023	現在の活動を長期的に続けてほしい。 今後も調査結果は定期的に知らせてほしい。 日本全体に活動内容を紹介してほしい。 調査結果や報告から、何をすべきかに重点を置いた交流や話し合いの場を設けてほしい。 大学と被災地が課題を共有して、繋がりを持ち続ける取り組みは素晴らしいと思う。 定期的に学ぶことで安心して生活ができていくことに感謝している。	『弘前大学による活動への認知』回答者のうち 47% 復興支援活動の継続を望む声と、長期的に活動を継続していることを評価する声が多い。成果報告会の形式も、大学から住民への一方的なものではなく、対話の機会を求める声も上がった。
2024	震災以来ずっと浪江町のために取り組んでこられた弘前大のみなさん、特に被ばく放射能のこと教えていただきありがとうございます。 地味な事がらを積み上げ大変ありがとうございます。 今まで活動や成果についてほとんど知らなかったの、理解する（活動内容について）良い機会になりました。 とても分かりやすい内容で良かったです。実際にプログラムを体験した学生の意見や感想もきけて良かったです。ありがとうございます。 大変勉強になりました。とても様々な分野で取り組まれていたことがよくわかりました。 「現在までの取り組みを継続していただきたい」それがお願いします。そして、このように報告会をしていただきたいと思います。今日の発表会（報告会）、大変参考になりました。 浪江をフィールドとして地域のさまざまな復興支援にかかわっておられることを知りました。ぜひ継続して活動して欲しいと思います。津軽三味線のように、細くではあるが力強く。 ネットの間違った情報や正しい情報を教えてもらいたい。浪江町に住む住民の健康の為に手伝って頂きたい。 町のために感謝あるのみ。これからも俯瞰的に町の方角性を助けてほしいです。 これからも浪江に寄り添って色々やってください。色々なイベントも沢山催してください。	これまでの継続的な活動に対する感謝の言葉とこれからも引き続き取り組みを進めてほしいという期待の声が多かった。
2025	弘前大学の職員や学生が、これほど多く浪江町の復興支援に関わり、様々な活動を実践していることにとても感動しました。 復興支援活動において、町、住民の声からこのプログラムが行われていることは、浪江町に根ざした活動であり、弘前大学の知見を浪江町の復興に役立てる有意義な、また、効果の高い活動であると改めて感じる事ができました。 子供達とおして、親にも興味を持ってもらう、家族で話す機会の醸成していくことの視点（気づき）には感心しました。 学生さんの声が聞けたのも良かったです。それぞれ真剣に学んでおられることが伝わりました。 継続的な活動、対話を大切にされている姿勢に脱帽いたしました。 大変有意義な成果報告会と楽しく参考になるご講演で参加して良かったです。 弘前大学の皆様のこれまでの取組が大変よくわかりました。 弘前大学の取組が、本日参加することで理解につながった。 放射線、環境、教育というこれからの浪江町の復興に欠かせないことへの支援に感謝したいと思います。 貴大学の 14 年にわたる質の高い取組み、本日の発表は思いやりと信頼関係に深く感動しました。やはり、「教育」「教養」が必要なことと改めて知ることができました。 日々「すべきこと」「しなければならないこと」を続ける大切さを知ることができました。ねぶたがとてもよかったです。 Well-being の特別講義は面白かったです。長生きできそうです。 活動が様々な地域に広がること、また、全地域の避難地域解除後や放射線の不安が払拭された未来が来たとしても、活動が継続されることを願っております。 引き続き、特に子供達に対する支援よろしく願います。 今後も浪江町の学生の学びのフィールドにして欲しいです。 これまでの活動をさらに深化して、大学生にも浪江町民にも展開して欲しい。 この活動が、次年度以降も継続して欲しいこと、さらには、浪江町のコミュニティ形成の一助となることを確信しております。 環境モニタリング、植物水性生物等の調査を今後も是非、継続していただきたいです。 得たデータ・知見をどのように伝えていくかの難しさを改めて感じました。この当たりについて、こういう工夫をしてきた等のお話しもあとと良いと思いました。 もっと皆さんに知ってもらいたいと強く感じた。 各プログラムの結果事例をひとつでも入れていただけたらと、理解が進みます。 被災地への誤解はまだ多いと思うので、今後も正しいことを伝えていただけたらと思います。 今後、近年の健康に対する食物の危険性（添加物、農薬等）について広く活動し、住民へ公開していただけると幸いです。	弘前大学から浪江町を訪れ活動している人数の多さへの驚きと共に、活動への理解、効果に対する気づき、これからも共に歩み継続していくことへの期待の声が多かった。

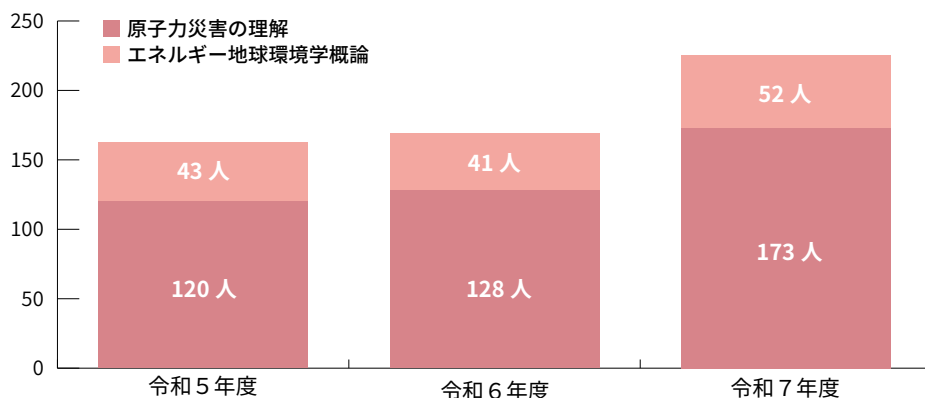
(1) 復興知事業に基づく授業

弘前大学では、専門分野の学びに加えて、特定のテーマを体系的に学べる「学部横断型副専攻プログラム」を用意しています。学部や学科の枠を越えて多様な方法を身につけ、幅広い視野や課題解決力を育むことができるのが特徴です。

被ばく医療総合研究所では、令和5年度から副専攻プログラム「放射線総合科学」をスタートしました。なかでも「持続可能な開発目標 SDGs（原子力災害の理解）」や「エネルギー地球環境学概論」は、福島復興支援活動を通じて培った教育・研究の成果を活かした授業です。学内外の専門家や、東日本大震災・原子力災害伝承館の語り部の方をゲストに迎え、福島第一原子力発電所事故による原子力災害について学ぶとともに、風評被害を含む被災地の現状を正しく理解し、日本のエネルギー事情についても考える機会となっています。

今回は、「持続可能な開発目標 SDGs（原子力災害の理解）」の授業で提出されたレポートから、学生のコメントを抜粋してご紹介します。本科目は高大連携公開講座としても開講されており、毎回10名前後の高校生も一緒に学んでいます。

復興知事業に基づく授業の単位取得者数



授業を履修した学生のコメント

〈令和5年度〉

- 福島県産の農作物や魚介類の安全性について、以前は知識がないのにも関わらず何となく反対していた。今後はこの授業で培った様々な知識をもとに正しく自分の意見を持ち、誤った情報に流されないように生活していきたい。
- この講義を受講する以前の自分や、家族、友人というような原子力や放射線に直接的な関わりが無い人たちに、この講義で学んだ知識を正確に分かりやすく理解できるように伝えるということが、現段階で私自身が果たすことのできる役割であると考えている。
- 本講義を受けるまで、自分は勝手に被ばくの影響は子孫に影響すると思っていた。自分の固定観念の愚かさに改めて気づかされたと同時に、正しい情報を知っていないと意図せずして他人を差別してしまう可能性があり、危険だと感じた。
- この講義で学んだ内容をもとに原子力発電・災害、放射線に対して偏見を持つ人や誤解をしている人に正しい情報を説明し、理解・受容してもらうことが現在の自身にできる最大限のことであると考えている。
- 当初中校生だった私は、インターネットにも触れたことなくテレビから受け取る情報がすべてだったため鵜呑みにしていました。このように、大きな事故があるとデマの情報が非常に流れやすくそのせいで被害を受けてしまう人がたくさんいます。このようなことをなくすためにも一つの情報にとらわれず、多くの情報や専門家の意見を聞き適切な情報を集めることが大切だと感じました。
- (高校生) 以前の私なら、被ばくによる汚染が解除されて安全にボランティア活動を行える状況になったとしても、ただ怖がるだけで行動できないと思います。しかし、今はこの講義を受け、原子力について正しい知識を得ることができました。原子力災害のボランティアが必要とされたときには、ここで学んだ知識を生かし、自信と勇気をもってボランティアに参加しようと思います。

〈令和6年度〉

- 原子力災害や放射線防護についての知識、被災者の方々の思い、復興の大変さなど様々なものを学んだと思う。これからの社会で原子力災害が起きたとしても今までよりは正しい知識をもって行動・判断ができると思う。
- 教員になったら教科教育だけではなく放射線のことや震災についての教育もしたいと思っている。
- 災害を忘れないことがどれだけ重要なことが学んだ。また、現地へ行ってかつての被災地の現状を自分の目でみたいと思う。そして感じたことを、周囲の人間とも共有し今後の原子力発電の在り方などについて意見を交換することが自分にできることだと考える。
- 自分の考えを完全に覆すもので、正しい知識、正しい考え方の重要性を強く実感した。もしこの考え方が修正されなければ被曝者の子供に対して偏見を持ち、正しく接することができなかったと思う。
- 大学に入学するまでは放射線に対して、福島第一原子力発電所の事故から連想された「危険なもの」、「体に有害なもの」というイメージしか持っていなかったが、線量や使い方次第で医療や人体にプラスの作用であるということを学んだ。
- 正確な知識を習得した上で、ボランティア活動への参加、被害者への差別や誤認識の回避などへの取り組みを積極的に行ってみたい。
- (高校生) 今回の講義で学んだ多様な視点からの原子力災害への計画を今一度周囲の人と話し合ってみようと思う。
- (高校生) 私はこの講義から学んだことを生かし、講義から得た正しい知識に基づいて原子力災害が起きた時には冷静に判断、行動し、また、周りの人にも学んだこと、原子力災害時にすべきことを伝えていきたいです。

(2) 教員研修

令和6年度 双葉地区小教研第二次研究協議会研修会への協力

弘前大学被ばく医療総合研究所 教授 三浦 富智

1 実施に至った経緯

双葉地区小教研第二次研究協議会（以下、二次研）では、各校が持ち回りで、小学校周辺の自然環境を活用した教育実践を教員研修として紹介している。弘前大学は令和6年度、室原川・高瀬川漁業協同組合およびみちのくファウナリサーチの協力を得て、なみえ創成小学校において「川の生き物ふれあい体験」を校外学習として実施した。

令和6年度は、なみえ創成小学校が二次研研修会の当番校であったため、同校の神村崇教頭より、本取り組みを研修会として実施するにあたり弘前大学の協力を依頼された。これを受け、神村教頭と研修会内容について協議を重ね、今回の教員研修会の実施に至った。

2 実施日

令和6年11月7日

3 実施場所

浪江町請戸川河川敷（道の駅なみえ裏）

4 参加人数

なみえ創成小学校 教頭 神村崇先生ほか双葉地区小学校教員7名
弘前大学からの参加者：三浦富智教授、藤嶋洋平助教

5 協力団体

室原川・高瀬川漁業協同組合、みちのくファウナリサーチ

6 実施内容

令和6年度に室原川・高瀬川漁業協同組合およびみちのくファウナリサーチの協力の下で実施している「川の生き物ふれあい体験」を題材とし、石倉カゴ内の石に付着した水生生物や堆積土中の水生生物の観察、さらに顕微鏡を用いた水生微生物の観察を、双葉郡教員研修の一環として実施した。本研修は、同協同組合ならびにみちのくファウナリサーチの協力を得て実施したものである。実施内容は以下のとおりである。

(1) 目的

室原川・高瀬川漁協が設置しているウナギ生息調査用石倉カゴ内に生息する水生生物（魚類、甲殻類、昆虫類、水中微生物等）の採集および観察をとおし、請戸川に暮らす生き物の豊富さを理解するとともに、食物連鎖や生き物と環境との関わりを学習する。

(2) 研修内容

①空間線量率の測定法

研修実施場所の空間線量率を測定する方法として、NaI シンチレーションサーベイメータ（アロカ社製）を用いて、空間線量率の測定法を指導し、参加者が体験した。

②空間線量率の活動上限（0.23 μ Sv/h）の根拠の説明

児童生徒が屋外で活動可能な空間線量率として環境省が定める基準値とその根拠を説明し、研修会場が基準値以下であることを確認した。

③個人線量計の使用法

個人被ばく線量計（アロカ社製）を使用し、個人線量計の男女別装着法を指導した。

④生物の採取法

石倉カゴの生物、底石に付着している生物、そして、川岸の藻類等の採取法を指導し、体験していただいた。

⑤生物の観察法

ルーペ、実体顕微鏡、正立光学顕微鏡を用い、採取した生物の観察法を指導し、体験していただいた。弘前大学が準備した実体顕微鏡および正立光学顕微鏡には CMOS カメラが接続されており、ノートパソコンや iPad を介して顕微鏡像を共有した。

⑥テープスライドガラスの作成法

作成が簡易で理科の学習でも活用可能なテープスライドの作成法を実演した。

7 研修会を実施して話題となった課題

顕微鏡を用いた生き物の観察は児童・生徒の関心が高い一方で、野外で簡易に観察できる顕微鏡システムを備えていない小学校が多いことが課題となっている。高額な教育設備については、地域で共通機器として整備するなど、共同利用を前提とした仕組みづくりが今後求められる。



(3) 出前授業

公益財団法人 福島イノベーション・コースト構想推進機構

弘前大学には、東日本大震災が発生した平成23年から、浪江町において多岐にわたるご支援をいただいております。令和3年度からは公益財団法人 福島イノベーション・コースト構想推進機構が支援する大学等の「復興知」を活用した人材育成基盤構築事業（以下、「復興知」事業）の採択校としても、多大なるご尽力をいただいております。

福島イノベーション・コースト構想*1の実現に向け、当機構では主な取組の一つとして「教育・人材育成」を推進しており、成長段階（小学校、中学校、高等学校及び大学等）に応じた地域、福島県内外の企業や研究機関等と連携した「出前授業」、「視察研修」、「実習・体験」等の実学を通じて『福島イノベ構想』、『地域』を牽引する人材を育む教育（イノベ教育）を展開しております。

そうした取組の一環として、福島県内の小・中・高等学校で実施する講座等に、学校の要望に応じた講師の紹介・派遣等を行っております。弘前大学の先生方にも講師としてご尽力いただき、子どもたちに多くの学びやきっかけを与えていただきました。

*1 福島イノベーション・コースト構想 について

2011年の東日本大震災および原子力災害によって失われた浜通り地域等の産業回復のために、新たな産業基盤の構築を目指す国家プロジェクト。6つの重点分野を位置づけ、福島ロボットテストフィールド等の拠点整備を含めた主要プロジェクトの具体化に加え、産業集積の実現、教育・人材育成、交流人口の拡大などに向けた取り組みを進めている。

実施事業：福島イノベーション人材育成支援事業

■福島県立相馬高等学校 『職業人セミナー』

講師：菊池 和貴 先生（弘前大学被ばく医療総合研究所 特任助教）

【開催概要】

日時：2022年11月9日（水）15:15～16:05

場所：福島県立相馬高等学校 教室

対象：同校 1年生 約20名

【経緯】

同校より、「1年生のキャリア教育の一環として『職業人セミナー』*2を実施したい。学校の性質上、将来的に研究職に就く生徒も想定されるため、大学の先生を紹介してほしい」との相談が寄せられた。これを受け、当機構より、菊池先生に講師としての登壇を依頼した。

*2 『職業人セミナー』 について

趣 旨：生徒が興味関心を持っている職業に就いている社会人の話を聞くことにより、その職業に対する理解を深めさせ進路意識の高揚を図る。

【講座内容】

- ・研究の内容や研究者としてのやりがい
- ・研究者を目指すために高校時代からやるべきこと

- ・大学での学びや大学院での学びについて
- ・看護師としての経験と、そこから研究者の道へ進まれた経緯について

実施事業：福島イノベーション人材育成支援事業

■福島県立相馬高等学校『地域理解講演会』

講 師：赤田 尚史 先生(弘前大学被ばく医療総合研究所 教授)

【開催概要】

日 時：2024 年 10 月 23 日(水) 14:15～16:05

場 所：福島県立相馬高等学校 講堂

対 象：同校 1 年生 130 名

【経緯】

同校より、「地域理解講演会」の講師として、「①研究者、②福島県に所縁、思い、理解のある方 ③生徒たちに対して将来の職業観を伝えられる方」という要望が寄せられた。これを受け、当機構より、赤田先生に講師としての登壇を依頼した。

【講義内容】

2024年10月23日 福島県立相馬高等学校「地域理解講演会」

教育・研究職の面白さとキャリアデザイン

～これからキャリアプランを考えるみなさんへ～

弘前大学 被ばく医療総合研究所
放射化学・生体影響評価部門
赤田 尚史

お話しする内容

福島県内には多種多様な企業が立地しており、毎年多くの求人募集があります。その中で、企業における研究・技術職は、何もなかったところから新しいものを生み出す（ゼロから生み出す）、また生み出すための手法や材料、形にする職業です。研究所における研究職は、基礎的なことを含め、新しい理解を生む職業です。一方、大学における教育・研究職は研究に加えてこれからの世の中を支える新しい人材を育成する職業です。

これから将来の職業（キャリア）を考える皆さんにとって、高校生活（3年間）はとても重要です。今回は、大学とはどんなところなのかを弘前大学を例としてご紹介いたします。また、自分がどのようなキャリアパスを通して大学教員になったのか、を簡単にお話しします。

キーワード

- ・研究職は楽しい？
- ・自分の将来をイメージする
- ・道を呼び込む準備をする

経歴
青森県青森市出身
・山形大学理工学研究科博士後期課程修了 博士（理学）
・2019年4月より弘前大学で勤務（6年目）

研究部門のHP



弘前大学
Department of Radiochemistry and Radiobiology, Institute of Radiation Emergency Medicine

【当日の様子】



(3) 出前授業

公益財団法人 福島イノベーション・コースト構想推進機構

また、当機構が主催する「ふくしまイノベ未来講座」*3においても、講師として多大なるご尽力を賜りました。

*3「ふくしまイノベ未来講座」について

福島県の未来を担う若者たちに向けて、福島イノベーション・コースト構想に関する有識者を招いて実施する出前講座。

実施事業:イノベ地域等における広域連携促進事業

■ふくしまイノベ未来講座

講師:田副 博文 先生(弘前大学被ばく医療総合研究所 教授)

【開催概要】

日時:2025 年 10 月 24 日(金)

場所:福島市立蓬萊中学校

対象:同校 2 年生 67 名

【経緯】

本講座は、震災から 10 年以上が経過した福島において、放射線に関する正しい知識の普及を図るとともに、地域の将来を担う中学生に対する科学教育の充実を目的として実施した。

福島県内では放射線教育に関する取組が継続的に進められており、同校においても 11 月、生徒が学習成果をまとめて発表する機会が予定されていた。これらの学習活動を補完し、理解を一層深化させることを意図し、専門的知見を有する講師に登壇を依頼したものである。

【講座内容】

講義では、放射線の歴史や基礎、日常生活における放射線との関わりについて解説。

あわせて、放射線は適切に利用することで医療等の分野で社会に大きく貢献することを示し、「放射線を正しく理解し、正しく利用することで、医療など様々な場面で人の役に立てる。まずは“正しい理解”から。」というメッセージを生徒へ伝えていただいた。

本講座を通じ、生徒たちは震災や放射線を正しく理解するとともに、福島がこれからどのように発展していくのかを多角的に考える視点を得ることができた。

“知ること”を力に、未来を見据える蓬萊中学校の生徒たちの成長が大いに期待される。

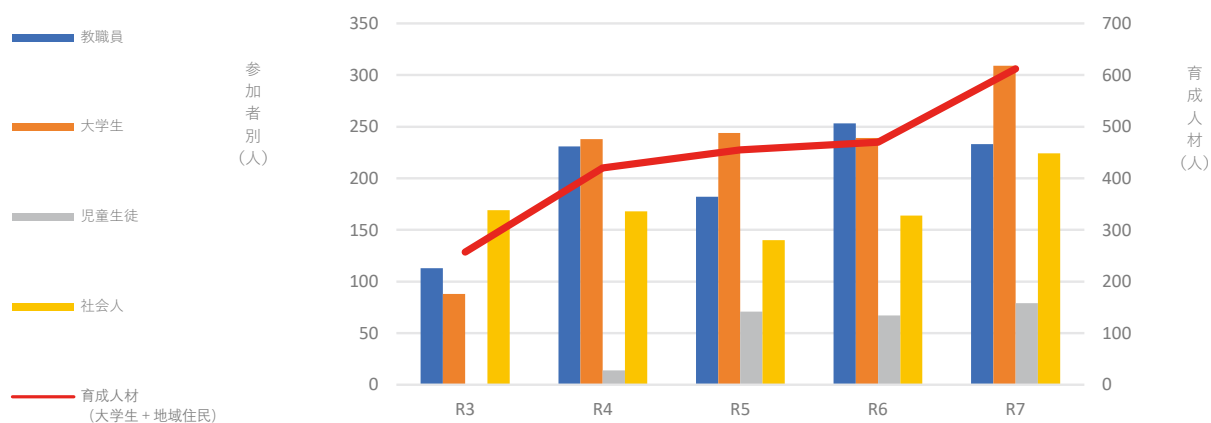
【当日の様子】



事業の参加者

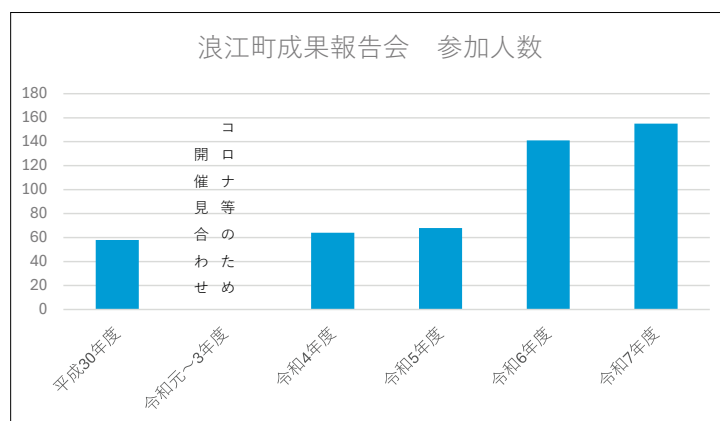
(2025 年 12 月実施分まで)

事業の参加者※		令和 3 年度 総活動日数 45 日間	令和 4 年度 67 日間	令和 5 年度 62 日間	令和 6 年度 77 日間	令和 7 年度 54 日間	合 計 (人)
弘前大学	教職員 外部指導者	113	231	182	253	233	1,012
	学部学生大学院生	88	238	244	239	309	1,118
浪江町	児童生徒	—	14	71	67	79	231
	社会人	169	168	140	164	224	865
育成人材 (大学生 + 地域住民) 小 計 (人)		257	420	455	470	612	2,214
合 計 (人)		370	651	637	723	845	3,226



※事業の参加者数は、学内活動、現地活動、オンライン活動等に参加した延べ人数を示す。

成果報告会参加人数 (町民、本学学生・教職員等)



町のイベントにも参加しています

年	月日	イベント名	支援内容・情報発信内容	担当者	関連する広報
2023	8月19日	なみえの夏祭り2023	イベント会場の設営補助、「復興知」事業の活動成果に関する情報発信活動を実施。	学 内：赤田尚史、菊池和貴、学生 5 名	https://irem.hirosaki-u.ac.jp/?p=3340
2023	10月21日 10月22日	標葉祭り	イベント会場および周辺道路の空間線量率の調査結果を含む津島地区イベントに係る Q & A の作成・提供、出張相談窓口を実施。	学 内：赤田尚史、田中真、菊池和貴 支援室：堀内輝子、名城真弓	https://irem.hirosaki-u.ac.jp/?p=3212
2024	8月17日	つしま夏まつり	健康相談、霧箱体験、金魚ねぶたクラフト体験、津島地区の空間線量率の調査結果に関する情報発信活動を実施。	学 内：大森康孝、菊池和貴	
2024	9月14日	ふれあい交流センターフェス	利き水体験を兼ねた浪江町の水の安全性に関する情報発信活動を実施。	学 内：赤田尚史 支援室：堀内輝子、名城真弓	
2024	10月13日	さあ行くべ！ つしま肉まつり	津島地区の空間線量率の調査結果と、利き水体験を兼ねた浪江町の水の安全性に関する情報発信活動を実施。	学 内：赤田尚史、大森康孝、学生 2 名 支援室：名城真弓	https://irem.hirosaki-u.ac.jp/?p=4156
2025	10月18日	請戸海岸 浪江浜まつり	請戸浜の空間線量率と海水中トリチウム濃度の調査結果、利き水体験を兼ねた浪江町の水の安全性に関する情報発信活動を実施。	学 内：菊池和貴、学生 2 名	https://irem.hirosaki-u.ac.jp/?p=5374
2025	10月19日	第3回つしま肉まつり	浪江町の請戸川の水質と利き水体験を兼ねた浪江町の水の安全性に関する情報発信活動を実施。	学 内：赤田尚史、菊池和貴、学生 2 名	
2025	11月22日 11月23日	なみえ町十日市祭	「復興知」事業の活動成果と、利き水体験を兼ねた浪江町の水の安全性に関する情報発信活動を実施。	学 内：赤田尚史、菊池和貴、学生 2 名 支援室：馬場弓枝、神村亜紀	

イベント参加は、事業期間内での COVID-19 流行もあり 2023 年度より本格的に再開しております。

なお、標葉祭り当日の対応が環境省事業によるものとなっておりますが、事前対応が「復興知」事業によるものとなっておりますのであわせて記載しております。

弘前大学との連携を通じた学びの深化

浪江町教育委員会教育長 横山 浩志

浪江町は、東日本大震災や原子力災害からの復興を進める中で、教育の再生を町づくりの根幹に据えてきました。その歩みの中で弘前大学との連携は、町の教育に新たな視点と力を与える大きな支えとなっています。また、教員研修や教育実践の共有を通じて子どもたちにより豊かな学びを提供できるようになりました。

さらに、弘前大学のプログラムは浪江町の教育再生に欠かせない重要な柱です。子どもたちが地域を誇りに思い、未来を切り拓く力を育むことに寄与しています。浪江町の教育に寄り添い、共に歩んでくださった弘前大学の先生方や学生の皆様には心から感謝申し上げます。皆様の温かなご支援とご協力が、地域の教育水準を向上させ、持続可能な教育へとつながっています。

地域のニーズに応じた教育プログラムである生物多様性学習プログラム（昆虫採集）や川の生き物ふれあい体験学習プログラムを通じて、大学の先生方や学生とともに学び合う中で、子どもたちは自ら問いを立て、試してみることで、理科の問いの質や観察力といった科学的思考を高めることができました。また、大学による放射線の事前測定により、子どもたちは多くの自然と触れ合い、環境教育やふるさと理解を深めることができました。

中学校の放射線教育では、講義や教材提供により科学的知識に基づいて放射線の理解が促進され、地域の課題を地域資源として活用する視点や安心して生活する力を育む支えとなりました。

弘前大学の学生にとって、震災遺構である請戸小学校の見学や学校教育支援、こども園や学校の行事での運営補助を通じて、浪江町の実践経験と地域貢献によって復興の現状を強く実感し、地域社会への貢献意識が高まっていると感じています。

最後に、桜復興・観光資源保全プログラムにより、毎年美しい桜が請戸川リバーラインにも咲き誇ります。子どもたちはその桜の美しさに感動しながら、タブレットで写真を記録し、花の観察を行います。そして、新年度のスタートに喜びを感じています。今後も、地域の希望を次世代へつなぐ一歩として、連携を共に進めていきたいと考えています。



つながり・安心・深化

前浪江町教育委員会教育長 笠井 淳一

◇ はじめに

私は震災後、福島県二本松市での避難先再開校・浪江中学校の校長として平成 15 ～ 17 年度に勤務していたことがあります。当時から弘前大学の調査研究事業の一環で、教職員や生徒達に対し、放射線教育等について様々な支援をいただき、大変ありがたく思っておりました。

その後も、「復興知」事業として引き続き本町の学校教育等も含め支援をいただきましたことに、改めて感謝申し上げます。

○ 放射線等に関する支援

前述の通り、避難先再開校・浪江中学校においても、弘前大学の調査研究事業の一環で、教職員や生徒達に対し、放射線等の基礎について分かりやすく教えていただくとともに、「霧箱」で目に見えない放射線の飛跡を観察する体験等、様々な教育支援をいただいております。

震災後、県内各学校における放射線教育については、本県教育委員会の「放射線等に関する指導資料」や動画教材を含む「放射線教育学習教材」、「放射線教育・防災教育実践事例集」等を基に取り組んでいます。

それら指導資料等を踏まえつつ、弘前大学による支援は、教職員自身の放射線等に関する理解の深化とともに、生徒に対する放射線教育への一層の安心・自信につながっていました。

復興知事業においても放射線教育への支援を継続して取り組んでいただき、学校生活や様々な教育活動に対して、こども園や小・中学校の教職員、児童生徒、さらに保護者の安心感につながっていると感じております。

○ 地域にふれる活動支援

双葉郡内の各学校では総合的な学習の時間に「ふるさと創造学」に取り組んでいます。これは震災後、避難先再開校における「ふるさと なみえ科」から、双葉郡全体での取り組みにつながってきたものです。

東日本大震災により、子どもたちはふるさとの喪失感を体験し、それがふるさとを学ぶ新たな意義の発見、ふるさと創造学の創出という大きなエネルギーにつながったものと思っています。

子どもたちは地域の伝統文化や伝統産業、復旧復興に取り組む町民の方々、町職員のみなさんとの交流から学び、探究活動を進めるとともに、地域のために自分たちにできることはないかと考え、実践しています。

(参考：本町「ふるさと創造学 Na・Mi・E」のコンセプト)

Na : Native・Nationwide

地元を見つめるとともに広い視野も持ちながら
さまざまな人・もの・ことに関わり

Mi : Mission・Mind

それらを基に、復興へのミッションや心意気を

E : Express・Enlighten・Encourage

表現し、未来へ向け自分をみんなを 勇気づける

また浪江町では子どもたちの主権者意識の育成・高揚とともに町の課題発見・解決に向けた意識の向上につなげようと「浪江町子ども議会」を3年前に再開しました。

弘前大学による浪江町の自然にふれる教育活動支援は、地域の自然の豊かさ・よさを実感し地域への愛着(ふるさと感)を深めるとともに、「ふるさと創造学」の探究活動や「浪江町子ども議会」へ向け、浪江町について考える多様な視点、気づきを与えるものとなっていると感じています。

○ 学校の教育計画を踏まえた支援内容・方法(含時期)の調整

各学校には、学習指導要領等に基づきながら、それぞれの課題解決に向けた教育計画があり、いつ、どのような内容をどの程度の時間数で指導するか、前年度中に作成しています。

新たな取組を導入する際には、当初計画されていた内容等の目標と照らし合わせ、前年度中の計画作成段階から調整することが望ましい形です。

弘前大学の先生方には、各教育活動支援の趣旨等について、事前に学校等への説明や調整を丁寧積み重ねていただき、各事業の成果とともに前述の「ふるさと創造学」の学びも含め、学校の教育活動の深化にもつながっております。

○ 子どもたちへの関わり

教育活動への支援に当たりコーチングの姿勢がポイントとなると思います。

私がソフトテニスのスポーツ少年団のお手伝いをしていたころ目にしたジュニア用指導書にコーチに必要な資質として、“COACH”のそれぞれの文字を頭文字として次の5つが挙げられていました。

【C：Comprehension（理解力）】

選手一人一人の特徴や力量を理解するとともに、ゲームをよく読み、理解する。

【O：Outlook（前途の見通し）】

それぞれの種目を楽しませること、心技体を変化させることなどのバランスを常に考え、シーズンを見通した展望と目標を持つ。

【A：Affection（愛情）】

コーチ自身がその種目に対して愛情を持つとともに、選手一人一人に愛情を持って指導する。

【C：Character（人間性）】

常に自己を振り返り、人間性を磨く努力をする。

【H：Humor（ユーモア）】

厳しい練習を楽しく取り組むことができる練習とするとともに、選手の記憶の中に失敗などマイナス面を残さないようにする。

弘前大学の先生方、学生のみなさんには、それぞれの専門性からのComprehensionやOutlookはもちろん、園児、児童生徒に対し、お一人お一人のCharacterを活かしながらAffectionとHumor溢れる支援をいただきました。園・学校の教職員とともにコーチングスタッフとしての一体感を感じております。

○ 「親和性」への配慮

各事業と地域のみなさんとの親和性を高めることがその成果に大きく関わってくると感じています。取組報告会における学生のみなさんによる「津軽三味線」演奏や、十日市でのNamie Water等の体験等も交えながら、様々なイベント、機会を活かし弘前大学の取組を発信していただきました。こども園、小・中学校の運動会や授業等、教育活動の様々な場面での支援や交流をとおし、年々、弘前・弘前大学、復興知事業が地域のみなさんにとって身近になってきたように感じています。

また、弘前大学の学生のみなさんの取組姿勢は、異学年交流、校種間交流等、様々な年代との交流を進めている中、子どもたちにとって貴重なロールモデルともなっています。

◇ 結びに

避難先再開校の浪江中学校で勤務していた際、「虹の彼方に」の歌を何十年かぶりに耳にしました。

Somewhere over the rainbow, skies are blue, and the dreams that you dare to dream really do come true.（虹の向こうの空は青く、信じた夢は現実のものとなる）

震災後15年となる今、震災当時思い描いた虹の彼方の一つのステージにはたどり着きつつあるように感じています。本町教育復興への課題は様々ですが、これまでのご支援に改めて感謝申し上げますとともに、「復興知」の新たなステージ、新たな「虹の彼方」を思い描き、その実現に向け、今後益々の研究実践にご期待申し上げます。

ありがとうございました。

弘前大学と浪江町

浪江町議会議員 紺野 則夫

平成 23 年 3 月 11 日は、朝から天気が良く春がそこまで来ており、穏やかな小春日和でした。中学校では卒業式を迎えそれぞれの春を謳歌しようとしているまさにその時、けたたましい地響きとともに大地震が発生し、津波、原発事故と連鎖的に被害が拡大し、尊い命と今まで築き上げてきた家屋・田畑、日々の暮らしまでも浪江町から何もかも奪ってしまいました。3 月 15 日、この世界に類のない原発事故の惨劇により浪江町を後にしなければならない道理があるものだろうか。

東京電力は事故の詳細を町に対し通報連絡を怠り、多くの町民は、高濃度の放射性物質が降り注いだ津島地区に集団避難を余儀なくされました。

さらに、国は原発事故を想定した「SPEEDI（緊急時迅速放射能影響予測ネットワークシステム）」による放射能拡散予想をいち早く解析していたにもかかわらず、その情報を町にもたらしませんでした。これはまさに、浪江町民は勿論のこと国民に対する背信行為でしかないと言わざるを得ません。

その時、弘前大学は、原発事故当初より浪江町内に立ち入り放射線ヨウ素の測定、甲状腺の影響調査など多種にわたり当町の放射線に関する調査を実施とともに、浪江町復興支援プロジェクトを立ち上げ健康相談・健康指導、医師の派遣など様々な分野から当町支援を行っていただきました。

平成 25 年 7 月 1 日弘前大学浪江町復興支援室を役場二本松事務所に設置し、復興の加速化に寄与していただいたこと、さらに、弘前大学被ばく医療総合研究所は、放射線の影響調査、分析等を行い健康管理は勿論のこと、浪江町が復興するうえで最も重要とされている放射線減量化につながる実証試験に着手するなど多種にわたり支援をいただき今があることに感謝しかありません。

特に放射線による子供たちの健康被害に心を痛めていた折、染色体検査の提案がなされました。町は子供たちの不安払しょくにつながることであれば何でもする、その一心でお願いをしたものです。検査結果から放射線による影響はほとんど無しの回答をいただき、子供は勿論のこと親御さん、そして私自身ほっとした心地よい虚脱感を覚えています。

15 年という長きにわたり、浪江町の復興、浪江町民の健康管理、心の支えをいただいたこと。明日への道標を指していただいたこと、そして町民に対し、情熱と心血を注ぎ町民を守っていただいたことに改めて感謝申し上げます。

令和 7 年 12 月 8 日

弘前大学とともに

浪江町健康保険課長 松本 幸夫

弘前大学と浪江町とのあゆみについて考えると、いろいろなことがあります。

2013年7月1日、浪江町役場二本松事務所内に弘前大学浪江町復興支援室が設置されて以来、今日まで健康保険課内でさまざまな取り組みを行っていただいています。

この組織のおかげで、町と一緒にあって、強い連携の下、活動でき、町の要望に対して誠実かつ迅速に対応していただいていることに心から感謝申し上げます。

弘前大学の取り組みの中でも、浪江町の復興をフォローアップする地域人材育成のための保健・環境・防災教育プログラムも年々増えて、2024年には「桜復興・観光資源保全に向けた教育プログラム」が新たに加わり、合計で9つになります。

その中でも特に心に残っているものが2つあります。

1つ目は、なみえ創成小学校の馬場校長が「なみえ創成小学校の子どもたちは浪江町の自然に触れずに育ってきた」という言葉から、子供たちに浪江町に生息する自然の生き物について知ってほしいとの思いから放射線生物影響を学ぶ学生のための教育プログラムができました。

2つ目は、吉田町長から「桜を守りたい」という相談を受けて始まった「桜復興・観光資源保全に向けた教育プログラム」です。この取り組みにより震災前より立派な桜が咲き、震災後初となる「さくら祭り」が15年ぶりに開催され、町内外からたくさんの人が訪れ、町内に賑わいを見せるようになりました。

当町は、震災から14年が経過し、復興が進んでいるように思われていますが、まだまだである。これからも、いろいろな人の力を必要としております。

その中でも、弘前大学がいつも近くで支えてくれる。このことが本当に心強いと感じております。

弘前大学とともに

浪江町立浪江にじいろこども園長 馬場 隆一

私は、なみえ創成小、中学校を5年間勤務し、現在、こども園に勤務して3年になります。この間、弘前大学の先生方、浪江町復興支援室の職員の皆様には多大なるご支援をいただいたことに、この場をお借りして心より感謝申し上げます。

弘前大学との関係の始まりは「あっぷるサロン」でした。平成30年4月のなみえ創成小・中学校創立時に着任して間もなく、地域住民向けリスクコミュニケーションのサロンを学校で行いたいとの相談を受けたことを記憶しています。その後、10月に行った、初めての小中学校合同運動会の実行委員会や当日の運動会にも積極的に参加され、学校と地域が繋がる大きなきっかけをいただきました。また、児童生徒が地域の方々と一緒に放射線について学んだり、学校花壇での野菜作りや校外自然学習の可否についてご相談をしたり、徐々に児童生徒、教職員、保護者へのリスクコミュニケーションに発展していきました。安心・安全な学校生活ができる環境づくりの始まりでもありました。

この5年間の「復興知」事業の前半では、小学校の授業での昆虫や川の生き物の観察についてご相談したところ、弘前大学主催の夏休み親子昆虫採集体験や生活科、理科の校外での昆虫採集が実現しました。また、生徒への放射線教育、小中学校合同運動会への学生ボランティアによる支援なども計画され、学校と弘前大学の繋がりがさらに強まりました。

後半の3年間については、浪江にじいろこども園での活動を振り返ります。

① こども園職員による敷地内の環境放射線量測定について

私が着任する前から、職員が輪番で園舎内外の空間線量や放射性物質の測定を行い、定期的に機器の交換や測定アドバイス、データの分析などを行っていただきました。職員の放射線の理解が深まり、安心・安全なこども園の運営に繋がりました。最近では、実測データに大きな変化がなく安定していることから、測定点や測定回数を減らすアドバイスにより、データの正確性は保持しつつ業務削減も図られました。

② 園外保育における放射線量等の測定について

ジャガイモやサツマイモを栽培している園借用畑の放射線量測定をしていただきました。測定データから活動での留意すべきことの説明を受け、安心して活動することができました。また、請戸浜や丈六公園の事前調査、結果報告もたいへん参考になりました。

③ こども園職員への放射線リスクコミュニケーションについて

これまでの実績である、放射能濃度の調査結果（天然成分と人工成分の年間線量の比較）のご説明により、生活における放射線の影響について職員の理解が深まりました。

④ 親子運動会への学生ボランティアによる交流支援について

毎年10月に行われた親子運動会の交流支援として、前日の打合せ、当日の道具係、補助係に加われ、スムーズな運営に協力していただきました。参加された学生さんとの会話から、震災後の復興途上の浪江町にも理解を示され、今後の学生生活、キャリアにも活かされるものと感じています。

このように、弘前大学の方々とともに多くの復興知の活動に私自身も関わらせていただきました。放射線の理解だけでなく、教育活動へのアドバイス、ご支援のお陰で、学校、こども園の職員も自信を持って、日々の教育・保育活動ができております。改めてこれまでの弘前大学の皆様の温かいご理解とご支援に感謝するとともに、これからも浪江町とのご縁を大切にいただき、浪江町の復興を力強く後押ししてくれると信じています。

継続的なご支援に感謝

浪江町立なみえ創成小学校校長 星 輝伸

東日本大震災以前の浪江町には小学校が6校あり、千名以上の児童が学んでいました。2011年3月11日の大地震後、東京電力福島第一発電所の事故による避難指示により、6つの学校は浪江町を離れました。その後、二本松市内で学校を再開しました。再開当初の児童数は33名でした。学校生活に必要な物品も不足する中、各地から届いた様々な支援、応援の手紙、協力があり学校を存続することができたと聞いています。

卒業を迎えるたびに児童数は減少していき、6校はそれぞれ休校扱いとなっていました。令和2年度末をもって津島小学校が休校となり、震災以前にあった浪江町内の小学校はすべて休校となりました。

そんな中、なみえ創成小学校は平成30年4月に、旧浪江東中学校跡地に新設されました。町の復興の中心的存在として、期待される中で開校でした。開校当初は8名の児童でしたが、現在では61名の児童が学んでいます。開校に至るまでの先人たちの努力はもちろんのこと、多くの支援があって今日に至っております。特に弘前大学の皆さんには、開校当初から継続的なご支援をいただけてきました。その内容は、運動会運営支援、児童への学習支援、請戸川の生き物調査、昆虫採集など、どれも児童の興味関心を引き出す効果的なご支援であります。

○運動会運営支援

今年度の運動会は5月17日(土)に小学校・中学校合同で行いました。あいにくの雨のため体育館での実施となりましたが、弘前大学の皆さんには、準備や後片付けなどを手伝っていただきました。

○請戸川生き物調査支援

6月6日(金)、低学年を対象にした請戸川の生き物調査を実施していただきました。学生の皆さんに生き物の採取をしていただいたり、説明をしたりしていただきました。学校に帰ってからも顕微鏡で様々な生き物を見せていただきました。



○教育支援

9月8日(月)～12日(金)の期間、全学年を対象に教育支援を行っていただきました。学習補助だけでなく、休み時間には一緒に遊ぶなどしてとても良い思い出を作っていただきました。

○昆虫採集支援

10月31日(金)には、低学年の児童と一緒に浪江町内の丈六公園で昆虫採集をしていただきました。トンボやバッタなど、児童は夢中になって捕まえていました。学生の中には、教員を目指す方もいると伺っております。そんな皆さんに、なみえ創成小の児童との交流が少しでも役に立てばと思います。



弘前大学のご支援は、児童の興味関心を高めるだけでなく、本校の教育課程とも合致した活動であります。今後とも、変わらぬご支援をいただければ幸いです。

体験的な授業を通して

浪江町立なみえ創成中学校校長 青田 亮一

本校では毎年弘前大学の先生方や学生さんにお世話になり「放射線教室」が開催されてきました。1年生は「放射線の基本」として放射線を可視化して見てみる活動。2年生は「身の回りの放射線」と題して利き水に挑戦。3年生は総まとめとして風評払拭のロールプレイを通した「放射線に関する情報と発信」について学びました。それぞれ学年の発達段階に応じたプログラムを準備していただいており、生徒の成長を見ることができました。その他にも技術科の出前授業として「放射能の計測と制御」に関する講座を実施していただきました。いずれも“体験”を通した学びであり、生徒たちは目に見えない放射線に対し、前のめりで授業に臨み、真剣に向き合う姿を見せてくれます。これらの系統的なプログラムは、生徒たちの知的好奇心を高めるとともに、放射線の理解につながっていると感じます。

双葉地区における放射線教育の充実は、正しい知識を身に付け、理解を深めることに留まらず、やがて外へ発信する力へとつないでいかなければなりません。地域の復興に向けて避けて通れない、放射線への“正しい理解”と“風評の払拭”。専門家の講話とプログラムは生徒たちにとって、これらの課題を“自分事”として捉え、考える貴重な体験の場となっています。双葉地区の放射線教育、地域の復興を支えるためにも、今後も弘前大学さんに継続した学びの場をご提供いただければと思います。



【可視化された放射線】



【利き水に挑戦】



【風評払拭ロールプレイ】



【技術科：計測と制御】

さくらが繋ぐ人と地域

絆さくらの会会長 小黒 敬三

私たち「絆さくらの会」は、東日本大震災以前においては「さくらの会」と称し、平成8年から商工会青年部OBが中心となって活動を始めました。きっかけは誰が植えたかも解らない、以前から当たり前のようにあった桜並木、特別な存在でもなかったその桜並木が病気で弱り花の付きも悪くなり見るに忍びないという思いから、軽い気持ちで始まったのですが、やめる理由もなく長く続いていました。

2011年3月11日も早朝から例年通り桜の剪定作業を始めました。(震災以前は朝仕事でやっていました)

「じゃ〜、明日からもよろしく……。」

震災後はメンバーが町外へ避難しているため土日に集合し、作業をしながら再会を楽しんでいました。何年かそのような状況の中で活動を続けていくうちに、町内の家々が徐々に解体され、元の原風景がなくなると同様に、記憶も薄れていくような感じになりました。しかし、桜並木だけは春になれば花が咲き、季節ごとの変わらぬ姿を私たちに魅せてくれる特別な存在となりました。ポツポツとそこに集まる人達も見られるようになり、増々次世代にこの風景を残さなくてはという思いと同時に、発足時のメンバーの高齢化など会の存続と技術の継承などの課題も気になるようになりました。

そのようなときに、震災直後から浪江町の支援に取り組んでいただいている弘前大学が、吉田町長の意向を受けて弘前公園管理の樹木医と共に調査チームを立ち上げ、私たちの活動を応援してくれる事になりました。最初の話し合いで、大学が関わるからにはただ桜の花がきれいになるだけではなく、弘前と同じよう、観光資源となるようにする、復興のシンボルとする、桜の手入れ作業を通して地域のコミュニティを再生する、という明確な目標が設定されました。

その後、現地調査や座学研修会、現場での実技指導、弘前公園での現地研修会、そして弘前大と東京農大の学生たちと共に桜苗木の植樹などを行いました。

その結果、本年震災後15年ぶりに「さくら祭り」を開催することができました。

地域への広がりには、津島地区の小中学校の桜の手入れ、川添地区にある殿様桜保存の行政区の取り組、幾世橋地区にある桜並木の地区住民での下草刈や片付け、さらには二本松岳温泉(震災時に町民が一時避難した縁で、震災直後から桜の手入れをすることになった)まで飛び火して千本桜を守る会が発足しました。

今後とも桜を縁として、人と地域が繋がる活動を続けてまいりますので、引き続き御支援よろしくおねがいします。

弘前大学との「絆」で蘇る浪江町の桜

絆さくらの会 衣川 裕史

絆さくらの会のメンバーとして、弘前大学の皆様が浪江町の桜の再生への取り組みに寄り添い、多大なご支援を頂いていることに心より感謝申し上げます。例えば、浪江町を流れる請戸川沿い約1.5kmには約120本のソメイヨシノが植えられており、浪江町を代表する桜の名所の一つです。弘前大学の皆様には、こうした場所の桜の管理作業の支援をして頂いてきました。

絆さくらの会の活動は、福島イノベーション・コースト構想推進機構による「大学等の『復興知』を活用した人材育成基盤整備事業」の一環として弘前大学にご協力いただいています。浪江町の桜のさらなる再生に向けて、弘前大学には、2024年度より東京農業大学等とも連携し、専門的支援プログラムを立ち上げて頂きました。具体的には、弘前大学被ばく医療総合研究所や農学生命科学部の先生方を中心とするチームが、桜の現状調査、桜の苗木植樹、そして弘前公園で長年桜守（樹木医）を務めた小林勝さんらによる剪定指導など、多岐にわたる支援活動を展開しています。浪江町では当会のメンバーと弘前大学の先生方・学生の皆さんが協働で桜の剪定作業を行い、木の状態に応じた適切な処置を実践的に教わりました。てんぐす病の枝・枯れ枝・成長を妨げる枝を除去する剪定方法はもとより、剪定後に施肥を行うことや高い枝を切って日当たりを良くし下枝を育てることなど、具体的なアドバイスを頂き、従来独自に行ってきた手入れ方法を大きく改善できました。さらに2025年3月には、会員有志6名が弘前大学の計らいで、日本一の桜とも評される弘前公園を訪問し、樹木医の橋場真紀子さんから直々に剪定作業のレクチャーを受ける機会も得られ、絆さくらの会にとって大きな刺激となりました。こうした弘前大学による支援の過程では、東京農業大学や他地域の桜ボランティアチームとの交流も生まれ、桜の維持管理に関する知見が地域の枠を超えて共有されるようになりました。

弘前大学との協働を通じて、浪江町の桜は着実に元気を取り戻しつつあります。適切な剪定と施肥の継続により、衰えていた老木にも新しい枝が伸びはじめました。また、町民の方にはよく知られていた、請戸川リバーラインのソメイヨシノの早咲き変異枝について弘前大学が増殖に協力くださり、オオシマザクラの台木への芽接ぎという技術でこの貴重な桜を増やす試みにも挑戦しています。数年後にはこの早咲きの子孫たちが地域の新たなシンボルとして花を咲かせてくれることを、期待しております。

これまでの取組を通じて、絆さくらの会と、弘前の皆さんとの間に温かな交流と強い信頼関係が築かれてきたと感じています。地域主体で進めてきた桜の維持管理の活動に対し、弘前大学が専門的知見と人の力で寄り添い、継続的に支援して頂いたことは、絆さくらの会の活動にとって励みとなりました。今後も、弘前大学との「絆」を大切にしながら、この連携の輪を絶やすことなく、歩みを進めていけることを心から期待しております。

ありがとう・弘大

浪江町行政区長会会長 佐藤 秀三

2011年3月11日、東日本大震災・大津波・翌日に起きた東京電力福島第一原発事故により段階的に避難。

15日には全町民が浪江町から強制的に避難せざるを得ない状態になりました。その時から避難場所でのスクリーニング検査が行われ被爆した方がいた時はその方から放射線は感染するのではないかと不安になる町民がほとんどでした。原発の安全神話の元に暮らしていた我々の放射線に対する知識のなさを実感しました。そんな知識のないまま不便さ不安さを覚悟して1部避難解除前の準備宿泊開始時(2016年11月1日)に浪江に戻り、震災当初から国及び東京電力からの発表に疑心暗鬼だった町民が多かった中、避難解除(2017年3月31日)後5月には弘前大学浪江支援室のスタッフが訪ねて来た時から様々な活動様子を見たり時々参加したりで弘前大が開催していた「アップルサロン」・「サロンなみっぷる」によって放射線への知識を得て多くの町民が自分で判断出来ていることは確かです。何よりも御校に感謝したいことは一部避難解除になり徐々に帰還する住民の居場所にいち早く訪ね、時には町の担当者、社会福祉協議会支援班の把握してない住民宅を訪ね放射線への疑問のみならず様々な悩みに対処していただいた活動です。また毎月自主開催している「廃炉を知る会」にもご参加、御意見、御助言をいただきありがとうございます。

浪江町行政区長会会長・佐藤秀三(自称・帰還者第1号)

これまでの弘前大学の活動に触れて

南津島上行政区長 紺野 宏

2011年4月14日、全町民に避難指示が出された後に、少なからず残っていた住民と床次先生との最初の出会いから、この度の「福島イノベーション・コースト構想推進機構 大学等の「復興知」を活用した人材育成 基盤構築事業」にまでつながったことに、当時から関わった一人として、うれしい限りです。また、あの混乱した状況の中であって、弘前大学と連携協定を締結できたことは、故馬場元町長の決断の何物でもありません。

2023年3月31日に津島地区を含む町内3地区で帰還困難区域内の特定復興再生拠点の避難指示解除がされました。この日を境に津島では、特定復興再生拠点内での活動が、少しずつ再開されるようになりました。

夏以降に開催された「津島 de シネマ」「標葉まつり 2023」のそれぞれの会場となった津島小学校・津島中学校。除染されたとは言え、放射線量への不安がありました。会場となった校庭をはじめ校舎回りを教育プログラムに参加されていた学生たちにより線量測定を実施し一覧表として提示できたことは、実行委員はもとより参加者皆さんの安心を担保できたものと思っています。感謝申し上げます。

また、つしま活性化センターを会場として、津島復興住宅住民や帰還住民に向けた弘前大学サロンなみっぷるが開催されています。「日常生活の“あれ、これ”お茶を飲みながらお話ししましょう」の声掛け通り、気を張ることなく参加できています。

私としては、2023年、自宅の改修が整わなかったことで帰還していなかったこともあり参加できず仕舞いでした。が、2024年以降は、機会をとらえて参加するようになりました。「体調で気になる事はありませんか」の健康相談。「放射線に関する相談もできます。」の各回の勉強会により放射線に対する理解を深め、さらに雑談のような疑問についてもわかりやすく解説をしていただいていることも魅力の一つになっています。

2024年・2025年の「弘前大学浪江町復興支援活動成果報告会」に参加して、弘前大学の支援活動が多岐に渡っていることを知りました。特に「放射線生物影響を学ぶ学生のための教育プログラム～子どもたちに浪江町に生息する自然の生き物を知ってほしい～」では、子供たちとの活動を通して保護者・教職員それぞれが、現状への不安を解決していくように感じました。子供が川で遊ぶことは日常だったはずなのに、それが遠いものとなってしまったことの現実を改めて感じました。是非とも、この活動を継続していただきますようお願いします。

今、特定復興再生拠点内の田畑の保全管理が進む中で、除染されていない森林が気になります。森林のほとんどが国有林ということもあり、地域住民としては手を出せないところでもあります。今後、安心して田畑に作物を作付け出来る環境づくりに向けた復興支援を構築していただければ何よりです。

これからも。変わらないご支援よろしく願いいたします。

生物多様性評価体験型学習プログラム ～川の生き物ふれあい体験学習～活動に触れて

室原川高瀬川漁業協同組合事務局 菅野 富美恵

橋の上から川を見る。震災以前は当たり前にあった人と川との風景をあの日を境に失いました。それは脈々とつながれていたものが一瞬にして失われることを思い知らされるできごととなりました。

私ども室原川高瀬川漁業協同組合は河川種苗増殖事業者であり、福島県より漁業権免許を受けた10魚種の魚を放流し増殖する。その成果もあり毎年多くの遊漁者に楽しんでいただいております。

放射能事故の影響が濃く残る河川となっている浪江町の請戸川と高瀬川。現在も遊漁することができず将来の見通しもたたない。組合、漁業権の存続はおろか、両河川のもつ共有の素晴らしい財産を後継につなぐことができない絶望的な状況をなんとかしなければいけないと迷走をつづけた十数年でしたが、弘前大学三浦先生より、子供たちに浪江町のこの川の素晴らしさを伝えたいとの話を聞き、願ってもないことと事業に参加をさせていただきました。

町のシンボルでもある「道の駅なみえ」前にある請戸川に「ウナギ生息状況改善事業」といった国の補助事業を活用し、ウナギ親魚増殖のための石倉（ウナギの隠れ家であり餌場）を設置した経緯もありその場所での体験学習となりました。

弘前大学の先生方、生徒のみなさん、そして浪江町の子供たちが、川の生き物に向けた目の輝きを見たとき、私共の胸にこみあげてきた気持ち。この川の素晴らしさの一端を将来のある子供たちに伝えることができました。自分たち漁協の活動が無ではなかったと思えた強烈な時間でした。

数年後、青年となったかつての子供たちが橋の上から川を見る風景を思い描きます。

まだ再生途中の浪江町で不足しているのは、つないでくれる何かです。人と町、人と環境、伝統と人の思いをつなぐ何かが、弘前大学の皆さんによる活動だと確信します。

これからも、子供たちが当然に享受すべき河川の恵みを守るため、その大切さを知るための機会を得るため、この事業が引き継がれていくことを切に願います。

浪江町の桜復興事業に係わって

(一財) 弘前市みどりの協会 緑の相談員(樹木医) 小林 勝

令和6年6月、弘前大学とともに浪江町を訪問し、請戸川リバーラインの染井吉野並木ほか町内の桜名所といわれる桜の植栽地の状況を視察した。

リバーラインは以前から、ボランティア団体である絆さくらの会によりサクラ類てんぐ巢病(以下「てんぐ巢病」という)などの一部除去作業は行われていたとのことだが、依然として、てんぐ巢病は残っており、腐朽した大枝や中小の枯れ枝も除去しきれておらず、剪定作業そのものの目的などがわからないままにてんぐ巢病を主体に剪定をしてきたものと思われた。また、他のサクラ植栽地は震災後枯れ枝や病気の枝などがまったく手入れされておらず、非常に荒廃していた。

驚いたのは、このサクラをボランティア団体だけに管理させていることであった。はたしてほとんど素人の集団であるボランティアだけでこれらの桜の管理、再生ができるのだろうかという疑問を感じながら、私としてはどのようなお手伝いができるのか、すべきなのか非常に悩ましい思いであった。そのため2回目の訪問時には、サクラ剪定法の座学を開催させていただき、剪定の基本技術と目的・効果などを説明することができたことから、俗に言われる「サクラ切るバカ、ウメ切らぬバカ」ということわざや、剪定すべきか残すべきかの判断のポイントなどを理解してもらえたような気がした。

私の経験では、一般にサクラ名所の維持管理はボランティアの存在意義は大きいですが、彼らのできる作業内容は安全第一を考えると施肥作業などほんの一部であり、剪定などは行政主導によるところが殆どであった。しかし絆さくらの会は行政の指導援助を受けることなく、最も難しい剪定という高所での作業を主体に活動を始めたところに、サクラを復活させたいという思いとサクラをとおして町を復興させたいという強い意志を感じることができた。今回の桜事業では、私がこれまで係わってきた弘前公園のサクラ管理の経験と知識を絆さくらの会の皆さんに少しでも伝えることができ、うれしく思うが、まだ伝え足りない事柄もあるので、今後も機会をとらえて浪江町の皆さんとの交流を深めながら、サクラ管理技術を伝えていきたい。

弘前大学としては、被ばく医療とはあまり関連のないサクラ復興事業ではなかったかと思われたが、農学生命科学部を交えることにより、浪江町に対してあらゆる面で真摯に対応しているのがよくわかった。また弘前大学の学生と東京農業大学の学生とが協同で作業をするというのも学生たちにとって良い経験になったのではないかなと思う。更にNHKの取材を利用し、全国に放送されたことは、事業のよい宣伝になったのではないかなと思われた。私にとってもサクラに関係して浪江町を訪問することができたことは、これまでにない得難い経験であった。今回のさくら事業に参加させていただいた弘前大学、現場でサポートしていただいた被ばく医療総合研究所三浦教授、農学生命科学部本多准教授並びに関係職員の皆様に感謝申し上げたい。

東京農業大学の浪江町サクラ活用事業について

東京農業大学地域環境科学部 入江 彰昭・矢野 加奈子

活動概要

東京農業大学では、食や農だけでなく浪江町のシンボルである桜の風景を復活させることで、ふるさとの風景を取り戻す。また、桜の苗木生産を新たな浪江町の地域産業とすることで浪江町の産業復興の一助になることを目的に2019年からサクラの生産活動、管理作業などを行っている。

これまでも、宮城県亘理町吉田中学校、長瀬小学校、高屋小学校で東日本大震災の大津波により校庭の多くの樹木が枯死したため、2015年に亘理町教育委員会、教職員、生徒、保護者らとともに校環境緑化を通じた子どもたちへの防災教育と居久根の景観再生活動を実施した。亘理町の実風景である居久根を復興の風景像とし、桜をはじめ花や実、紅葉の楽しめる校庭になるように町の木サザンカ等を校庭外周に植栽した。生徒たちの日々の管理のおかげで、樹木は元気に育ち、毎春3月に訪れるたび桜のつぼみが膨らんでいる。

こうした経験を踏まえ、今後も福島沿岸地域でのまちづくりにおいて復興公園の樹木、道路の街路樹等として、桜などの緑化樹木の需要が高まることが予想されるため、浪江町の復興プロジェクトの一環として桜の苗木の育成を提案し、毎年学生が生産者と一緒に植樹から掘り取りまで行い、持続可能なコミュニティの再構築につなげている。2019年より染井吉野、山桜、江戸彼岸桜など数種類の桜の苗木を農家で各500～1000本生産し、2023年には経済産業省内の中庭に、浪江で生産された7本の桜（紅枝垂れ桜、大漁桜、神代曙）が植栽された。

活動に参加した学生たちからは、

「浪江町に来ると人のあたたかさや、つながりの大切さを強く感じられます。加えて、農家さんは前向きな心や挑戦心を持っており、浪江町に来る度にその気持ちに元気づけられ、私もやりたいことを全力で頑張ろうと思えます。今後も浪江町や地域の方と関わり続け、浪江町を盛り上げることができたら嬉しいです。」

「今回サクラの掘り取りという貴重な体験をした。サクラというと、春の公園で花が満開になった姿を想像するため、圃場のサクラは新鮮に思った。ソメイヨシノの掘り取りの際に、大学周辺の歩道を歩きながら「ソメイヨシノは浅根性のため、根上がりしやすい」と習ったことを思い出し、根に注目して掘り進めた。初めてサクラの根をまじまじと見たが、初心者でも根が浅く広がっていることがわかり、根が舗装を持ち上げてしまうことに納得した。作業自体は、初めスコップで太い根を切ることが難しいと感じたが、慣れてくるとどの方向に根が伸びているかを予想し、コツを掴むことが出来た。馴れない作業だったが非常に楽しい体験だった。」

など体験こそ理解、フィールド実習・現場だからこそ学べた気づきや感想をみることができ、桜の苗木生産、地域の風景づくりの実習の意義を感じている。



2025 年 2 月 1 日 桜の掘り取り作業実習

スケジュール												
月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
内容	1月末 サクラの出荷作業 一掘り取りのお手伝い実習	2月末から3月 サクラの苗木の定植作業	2月末から3月 サクラの苗木の定植作業	4月上旬ごろ開花		サクラの状態を調査	7月下旬園場の草刈り					江戸川沿いのサクラの管理
備考	・出荷時の樹高は2～2.5mくらいのもの	・畑に樹高1mくらい苗木を植える				・弘前大学との合同調査						・絆さくらの会の作業をお手伝い ・テングス病の剪定、枝の処理など

図：現在の年間スケジュール

2023 年からは地元でサクラを管理している絆さくらの会の皆様と共に江戸川沿いのサクラの管理作業、2024 年からは弘前大学との協働によるサクラの調査、管理作業を行っている。

活動では、絆さくらの会の主導のもと、テングス病にかかった枝の除去や枝の片づけ、新たな景観創出のための植樹などを行っている。



写真：2024 年（左）と 2025 年（右）の桜管理作業の様子

活動の課題と展望

浪江町内の桜の名所を再生させ、さらには桜をはじめ緑の風景づくりを通じて、コミュニティ再生につながれば、と思う。こうした活動を継続することで、交流が文化となり、大学(学校)と地域(行政)、学生と住民等が連携し、ふるさとの風景再生のお手伝いをしていきたい。

サクラの管理作業は適切な調査と時期に合った管理を継続して行う必要がある。また、管理作業の際の人手を創出するための広報活動を行う必要がある。しかし、だれがどこで発信するのか、どのような内容載せるかなどの課題があり、今後は検討していく必要があるだろう。また、住民が管理に参加できるようにするためには安全管理が必要となり、道具の準備、開催時の安全管理基準や手順の確認、事故発生時の体制などをきちんと整えていく必要がある。

管理作業に住民が参加し、サクラ景観が守られるだけでなく、住民のコミュニティの創出やふるさとづくりに寄与できるよう弘前大学と協力して活動を継続していきたい。



写真：これからも浪江町の美しいサクラ景観のために

生物多様性体験型学習プログラム(昆虫採集編)を通した学び

福島県立医科大学 放射線生命科学講座 助教 中山 亮

弘前大学大学院保健学研究科博士後期課程生体検査科学領域 2024 年修了
群馬県出身

私は大学院生として、活動の初期段階から数年にわたり本活動に参加させていただきました。昆虫採集を通じて放射線が環境に与えた変化について学ぶという、一見すると小さな活動ではありますが、その本質は、自然環境への理解を深めながら復興の基盤を築き、将来、浪江町を担う次世代を見据えた取り組みであったと感じています。結論から申し上げますと、本活動への参加は、「復興とは何か」を学び、考える契機となり、自身の価値観に大きな影響を与えた非常に有意義な時間でした。以下に、活動を通して得た印象について述べます。

まず、本活動に参加した率直な感想は、「楽しかった」の一言に尽きます。昆虫採集は、多くの人子ども時代に経験している身近な活動であり、私自身も童心に帰って楽しむことができました。採集した昆虫を標本にし、それをなみえ創成小中学校に展示していただいた際には、大きな達成感を得ることができました。また、公園で虫を追いかけて元気に遊ぶ子どもたちの姿や、図鑑を見て虫の名前が分かった瞬間の無邪気な笑顔を目にし、この活動に参加してよかったと心から感じました。活動そのものを「楽しい」と感じられることは、何よりも重要であると実感しました。

次に、本活動を通して学んだ最も大きなことは、「復興とは何か」という問いです。子どもたちが虫取りをする姿を見て、気兼ねなく自分の住む土地の自然に触れられることは、本来あるべき日常の姿であり、放射線の影響によって失われてはならないものであったと改めて感じました。一方で、参加された小中学校の教員や保護者の方々からは、放射線による身体への影響への不安が語られ、遊ぶ場所も自宅周辺や屋内、あるいは放射線の心配がない地域に限られているという現状を伺いました。

活動に参加する以前、私は「復興」とは震災前の姿を取り戻すことだと考えていました。しかし、本活動を通じて、そのイメージは大きく変わりました。震災前の浪江町の自然は、ホームページなどに数多く残されていますが、大きく変化した環境の中で当時の姿を完全に再現することはできません。だからこそ、復興とは「今の浪江町が、今の浪江町らしさを表現できる状態をつくること」なのではないかと、自分なりに解釈するようになりました。本活動は、子どもたちを起点として大人を巻き込み、自然環境について考える機会を提供すると同時に、その思いを後世へ継承することを目指しているのだと感じています。活動の成果が形となって現れるまでには時間を要しますが、将来、子どもたちが胸を張って浪江町を語る日が来ることを心から待ち望んでいます。

一方で、活動を通して今後の課題も感じました。本活動では、より多くの住民の方々を巻き込むことが重要である一方、昆虫そのものに苦手意識や嫌悪感を抱く方が少なくないことが大きな課題だと感じました。昆虫採集は、安価で誰でも気軽に楽しめる優れた活動である反面、「虫は気持ち悪い」という率直な印象を多くの大人が抱いていることも事実です。活動自体に関心があっても、入り口の段階で心理的な壁があると参加しにくくなります。今後、植物や動物、海や川の生き物など、より親しみやすいテーマが加わることで、さらに多くの人々が関心を持つのではないかと感じました。安全面や予算、事業規模の制約があることは承知していますが、将来的に本活動が発展し、幅広い自然環境に触れる機会が提供されることを期待しています。

最後に、本活動の今後への期待について述べます。現在浪江町に住んでいる、あるいはこれから生まれてくる子どもたちが、将来の浪江町を担っていくことになります。本事業は最終年度を迎え、一区切りとなりますが、この活動自体はまだ始まったばかりだと感じています。浪江町の復興と未来を考えるのであれば、どのような形であっても活動の継続が不可欠です。小中学校で学校行事として昆虫採集が実施されたことは、継続に向けた大きな一歩であると考えています。継続することは容易ではありませんが、その先にある浪江町の明るい未来を期待しています。私自身も、本活動を通して得た経験を社会に還元し、未来を創る一助となれるよう尽力していきたいと思いをします。

最後になりましたが、このような貴重な活動に参加させていただいたことに、心より感謝申し上げます。

「イノベ活動から福島復興へつなげる」

富士電機株式会社 三瓶 葵

弘前大学大学院保健学研究科博士前期課程放射線技術科学領域 2024 年修了
福島県出身

福島イノベーション・コースト構想事業に、卒業研究を通じて関わったことは、故郷・福島の復興に自分の手で触れられた貴重な経験でした。

私は福島県須賀川市出身で、小学 5 年生のときに東日本大震災で被災しました。津波被害はありませんでしたが自宅は半壊し、その後は不要な外出を控え、ガラスバッジの装着や甲状腺検査など、放射線と隣り合わせの生活に一変しました。幼少期に病院にお世話になった経験から医療職を志し、弘前大学医学部保健学科放射線科学技術科へ進学しました。

本事業に関わるまでの経緯は省略しますが、福島復興に継続的に取り組む研究室があると知り、いくつかの研修に参加しました。川の水を採取して放射性物質を測定したり、現地で大気中放射線量を測定し、震災直後から現在までの変化を教授らのデータと比較・考察しました。なかでも印象的だったのは、浪江町復興支援活動成果報告会・交流会で、研修結果を発表し、司会を務めたことです。福島出身であることを伝えると、消極的になっていた地域住民の方々が温かく話しかけてくださり、つらい記憶を共有しながらも、「学んだ自分が伝える」意味を強く実感しました。



地震による被害からは立ち直っても、原子力発電所事故による被害はそう簡単に解決する問題ではありません。活動を通して、放射線に不安を抱く人や、根拠のない風評被害に苦しむ人に対して、自ら得た正しい情報を提示できたことは、大きなやりがいになりました。

現在は放射線に関わる仕事に就き、原子力発電所のモニタリング設備の整備や機器の開発に携わっています。原子力を利用し続ける限り放射線との付き合いは終わりません。放射線と長く安全に向き合っていく必要があるため、その基盤を支えることが今できることだと考えています。

また、どれほど優れた機器があっても、それを適切に扱える人材がいなければ意味がありません。今後も弘前大学から放射線に詳しい人材が育ち、福島の復興と安全な社会づくりを支えてくれることを期待しています。私自身も、放射線の専門性を高め続けながら、形を変えつつも、福島の復興に関わり続けていきたいと思っています。

浪江での学びとリスクコミュニケーションへの展開

長瀬ランダウア株式会社 織田 侑樹

弘前大学大学院保健学研究科博士前期課程放射線技術科学領域 2024 年修了
岩手県出身

私は学部生のときに本事業に参加し、環境中における放射性物質の測定方法を学びました。修士では復興支援活動成果報告会に参加した他、事業内容を更に発展させ、浜通り地域の3町村で測定・解析を行い、住民に対して結果の説明を行いました。参加することで知見が広がり、浜通り地域に対する解像度をかなり高めることができましたと思います。

中でも印象に残っているのは、成果報告会で多くの方々に来場いただき、自分たちの活動が浪江町全体の活気や住民の不安軽減に力になっている、と感じたことです。テレビのニュースやネットではわからない、実際の住民の様子を体感できたことは非常に貴重な機会だったと感じています。一過性の行事で終わらせることなく、継続的に、かつ内容を充実させながら活動を行う本事業は、経時的变化を確認できるだけでなく、住民との信頼関係を醸成する上でも重要な活動だと感じました。この考えは私の修士での研究においても、住民との接し方や、説明の方法に活かすことができました。

修士卒業後は今までに学んだ放射線に関する知識を活かし、個人被ばく線量測定サービスを主に行う長瀬ランダウアという会社で働いており、福島とは原発関連で関わりがあります。本事業への参加は、病院で働く以外の選択肢を考えられなかった自分にとって、他の選択肢を知ることができたきっかけの1つになったと思います。

弘前大学には、本事業で得た多くの知見や地域住民とのつながりを今後活かして欲しいです。複数年にわたり実施したからこそ得られた意見や住民の反応は多く、かつ深いと思います。また、住民との対話で感じたのは、時にデータの質や丁寧に作った説明資料より住民との信頼関係、話しやすい関係が大切になる、ということです。これは定量的に判断できず見えないからこそ軽視されがちですが、一朝一夕では決して得られません。ぜひ弘前大学には今後も何かの形で継続的な活動を行っていただき、他事業では真似できないような、地域住民の現状と希望を反映した成果を期待しています。

最後になりますが、弘前大学の更なる発展と、浪江町を含む浜通り地域の更なる活気を願っています。

福島イノベーションコースト構想事業を通じて得た学びと経験

アロカ株式会社 田岡 愛弥

弘前大学大学院保健学研究科博士前期課程放射線技術科学領域 2025 年修了
北海道出身

私は学部 4 年次から博士前期課程 2 年次までの 3 年間、本事業に参加させていただきました。浪江町に実際に伺い、放射線計測の実習に参加したことや住民の方々と対話させていただいたことは、今振り返っても非常に貴重な学び・経験だったと思います。

中でも 2023 年に参加させていただいた浪江町の旧津島小中学校での放射線計測実習が強く記憶に残っています。敷地内でお祭りを開催予定とのことで、開催前に校舎内外の広い範囲の放射線分布を測定し、データをまとめました。データまとめには非常に苦労しましたが、結果として標葉祭り 2023 の開催に貢献することができ、非常に嬉しかったです。

また、2024 年に参加させていただいた復興知事業活動報告会も印象に残っています。他大学の皆さんの活動を知る機会はそれまで無かったのですが、それぞれの専門分野の視点から福島県の復興という 1 つの目標に向かって取り組んでいる内容を確認することができ、刺激を受けるとともに、研究活動のモチベーションに繋がりました。

現在はアロカ株式会社で、放射線計測装置の設計・開発に従事しています。本事業を通じて浪江町に伺わせていただいたことで、「地域住民の方々が安心して暮らしていける」と思えるような放射線計測装置を作りたい、と考えたことが就職のきっかけの 1 つでした。福島県では廃炉作業が重要な課題になっていると認識していますが、未だ解明されていない点も多く柔軟な対応力が求められると思います。そのような中で、福島県のニーズに応えられるような放射線計測装置を開発できるよう、日々精進しているところです。

弘前大学には今後もこのような事業を継続して欲しいと強く思っています。浪江町に実際に伺うことで、机上では得られない貴重な学び・経験が得られることは間違いありません。私も本事業に参加して復興の現状や現地の状況を目の当たりにすることで、復興の役に立ちたいと考えるようになりました。そのような「きっかけ」を得る場があることで、より浪江町に興味を持つ学生が増え、活気が増していくのではないかと思います。

最後になりますが、浪江町ならびに弘前大学の益々の発展を祈念しております。

●2021年度



中学校で放射線に関する授業



浪江町議会議員 弘前大学を訪問



第1回サロンなみつぶる



東日本大震災・原子力災害伝承館見学



地震観測点における微小振動を用いた地盤調査



地震観測点（気象庁）見学



地震観測点（防災科学技術研究所）見学



日本原子力研究開発機構 廃炉環境国際共同研究センターを訪問



第2回サロンなみつぶる



福島第一原子力発電所見学



請戸川での調査法の実習



大気浮遊塵測定システムに関する説明



ハンドトリートメントの様子



椅子を用い安全な運動指導の様子



スペクトロメータを用いた測定

●2022年度



浪江町議会議員 弘前大学を訪問（福田学長からの挨拶）



第1回分科会開催



地域デザインセンターなみえ開所式



地域デザインセンターなみえ開所式



親子昆虫採集集合写真



採集した昆虫を同定している様子



実体顕微鏡で昆虫を拡大して観察している様子



なみえ創成小学校



昆虫採集の様子



福田学長浪江町役場を訪問



浪江町成果報告会 福田学長挨拶



浪江町成果報告会 床次所長発表



浪江町成果報告会 囃子組の演奏



浪江町成果報告会 伝承館語り部講話



なみえ創成中学校での放射線に関する授業の様子



ガンマ線スペクトル測定



富岡町食品検査所の見学



福島県立医科大学セミナー

●2023年度



福田学長浪江町役場を訪問



なみえの夏祭り



福島県浪江町において環境放射能を学ぶ学生のための教育プログラムを実施



健康づくり支援 万華鏡組み立て作業の様子



浪江町職員の健康相談



浪江にじろこども園運動会



震災遺構の見学



第8回福島原発事故による周辺生物への影響に関する勉強会



なみえ創成小中学校合同運動会



浪江町成果報告会 学生発表



浪江町成果報告会 三味線演奏



浪江町立なみえ創成中学校で放射線に関する授業を実施



健康づくり支援 正月飾りの組み立て作業の様子



福島高校来訪



浪江町分科会

●2024年度



なみえ創成小中学校合同運動会



浪江町分科会 吉田町長挨拶



空間線量マッピング実習



富岡町調査



福島県放射線管理士セミナー



就労支援・子育て支援 アロマハンドマッサージ



復興知事業活動報告会参加



福島県勉強会



なみえ創成小学校 教育支援



フレッシュかもめ（セラバンドエクササイズ）



津島地区（体組成や肺活量の測定と結果説明）



浪江町職員の健康相談



絆さくらの会 弘前公園現地研修会



つしま肉まつり



富岡イベント 利き水



浪江にじろこども園運動会



すてきな写真たてをつくろう



なみえ創成中学校 放射線測定体験の様子

● 2025年度



浪江町分科会



空間放射線量マッピング実習



子育て支援 参加者の方々とのハンドクリーム作り



浪江町職員の健康相談



桜事業リバーラインで変異枝を採取する小黒会長と小林さん



桜事業芽接ぎをする本多先生と留学生



「復興知」事業成果報告会参加



ふくしまメッセンジャーズ 赤田教授からの説明



成果報告会ふれあい文化祭 食の交流、津軽三味線サークルによる演奏、ストリートダンスサークル A.C.T. によるパフォーマンス



道の駅なみえでの健康相談



浪江町桜復興プロジェクト 胸吹き枝を剪定する学生



絆さくらの会、東京農業大学と弘前大学の協同



復興知事業 十日市祭



健康づくり支援 ポンポンキーホルダーづくり



未来への灯火

公益財団法人 福島イノベーション・コースト構想推進機構
教育・人材育成部 部長 鈴木康隆

弘前大学におかれましては、「大学等の「復興知」を活用した人材育成基盤構築事業」のみならず、東日本大震災発生年の2011年より浪江町と連携協定を結ばれ、今日まで多岐にわたり浪江町へ様々なご支援を賜り、深く感謝申し上げます。

このたび2021年度から2025年度の5か年の事業推進成果報告をいただくにあたり、各プログラムへの講評および全体の総括について申し述べさせていただきます。

まず「地域教育を学ぶ学生のための教育プログラム」についてですが、不測の事態への対応を含む実践的な講義が展開されており、人材育成の観点からも非常に意義深いと感じました。教育現場では学生の皆さんの若い力が求められる一方、さまざまな場面で即断が求められることがあるにも関わらず、その物事への対応が難しいこともあるという現実に触れ、判断の難しさや現場が抱える葛藤について改めて考えさせられました。

次に「放射線防護を学ぶ学生のための教育プログラム」では、継続的な長期測定により震災前と同等の状況を確認し、その情報を地域に共有されたことは、安心につながる重要な成果です。学生が現地の実情に触れ、知識を深めることは、復興と人材育成の両面で意義あるものと感じました。

そして「放射線生物影響を学ぶための教育プログラム」は、放射線量に関する制約などの困難を乗り越え、わずか1組の親子の参加から始まった取り組みが関係者の皆様のお力添えにより着実に発展してきたことに敬意を表します。

さらに「環境放射能を学ぶ学生の教育プログラム」は、地域資源や自然の魅力、これまでの成果や真摯な取り組みが積極的に発信されており、地域への想いが形となって還元されていくことを強く感じました。地域の魅力を再発見し、次世代へつなげていく取り組みは、地域活性化にもつながるものと確信しております。

最後に「桜復興・観光資源保全に向けた教育プログラム」ですが、立ち上げ当初からその歩みを見守って参りました。報道等で紹介されるたびに、剪定、刈込などの様子から見事に復活していく状況を拝見し、関係者の皆様のお骨折りに畏敬の念を持っております。浪江町の桜が満開に咲き続ける未来を感じました。

これまで貴学のプログラムを見せていただき、学生の皆さんの声に触れる中で、貴学の取り組みは実践的で有意義な学びであることを実感していました。また、例年開催されている成果報告会で、先生方や学生の皆さんの発表を直接伺うことは、各プログラムの意義と学びの深さを再認識する貴重な機会となっていました。

浪江町との連携のもと、貴学が有する高度な知的資源を復興に還元し、復興を担う人材育成に取り組みされてきた姿勢と成果に、改めて心より敬意を表します。学びの最終段階にある学生の皆さんが複合災害に見舞われた福島県浜通りをフィールドに活動し、地域の方々と交流しながら復興の歩みや課題を肌で感じる学びは極めて貴重であり、人生を豊かにする有益な経験であると強く感じます。こうした取り組みが学生の成長に留まらず、地域の未来を明るく照らす希望につながっていくものと確信しております。ご尽力をいただいた貴学の皆さまに心より感謝申し上げます。本事業は今年度をもって一区切りとなりますが、今後とも変わらずご支援とご協力を賜りますようよろしくお願い申し上げます。

発行・編集・問合せ先

弘前大学被ばく医療総合研究所

〒036-8564 青森県弘前市本町 66 番地 1

TEL : 0172-39-5401

Mail : jm5401@hirosaki-u.ac.jp

URL: <https://irem.hirosaki-u.ac.jp/>



弘前大学公式 HP



弘前大学被ばく医療総合研究所公式 HP



弘前大学被ばく医療総合研究所

本報告書は、福島イノベーション・コースト構想推進事業「大学等の「復興知」を活用した人材育成基盤構築事業」により発行しています。

無断複製・転載禁止